川柳塔

昭和四十一年一月八日　第三種郵便物認可
昭和五十六年十月二十五日　印刷
昭和五十六年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六五四号

日川協加盟

特集・後進にのぞむ

No. 654

十一月号

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

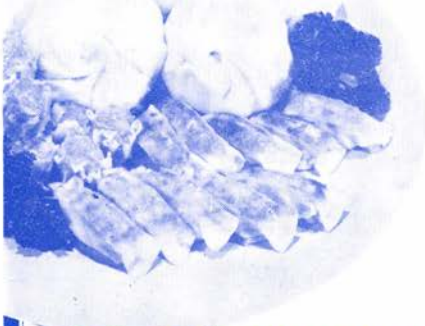
柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社

大　阪　支　店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電　話（779）1690～2番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



豚饅（ぶたまん）・焼餃子（やきぎょうざ）
焼売（しゅうまい）・叉焼饅（ちゃあしゅうまん）

551 HORAI

大阪・なんば
蓬莱

TEL (641) 0551

《支店・出張店》
なんば高島屋　心斎橋そごう　梅田阪神百貨店　天満橋松坂屋
中之島サン・ストア　なんば新川店・新川売店　ドージマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴　京阪ショッピングモール　淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店　近鉄百貨店（アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店）

ある「コラム」　西尾　栞

番傘九月号の第五時代ノートに、私は今、東京新聞夕刊に毎日連載されているコラム「川柳漫歩」に注目している。筆者は林富士馬氏（文芸評論家）。今日までに例句としてあげられた作品の中には、吉川雉子郎、西尾栞、時実新子、村木碧水、井上剣花坊等があり、柳多留、武玉川からも多く引用されている。という岸本吟一さんの――これからの川柳は――を読んで自分の名が出ているので、日川協の常任理事会にお会いしたのを機会に、伺ってみると、お忙しい中を、早速コピーを送って下さった。感謝感激の至りである。そのコピーの中の二、三を採録してみる。

面白い面白くない生きている　吉川雉子郎

吉川英治の「自筆年譜」を見ると、明治三十八年（十三歳）「芭蕉句抄」を露店で買い、頻りに暗誦、また句作をおもう。この句抄以後数年身を放たずとある。また明治四十五年、二十歳「井上剣花坊、伊上凡骨、川上三太郎氏らと相知る。「新川柳」発行にあたり柳樽寺同人となる。雉子郎と号す」というところもある。その後の吉川文学の基礎は、この頃の川柳習練にあったように私は考えている。川柳に自信のついた吉川英治は、吉川柳を研究し、「大正川柳」大正五年二十四歳に「古川柳隅田考」を発表しているが、多くの吉川の文章のうち、注目すべき資料と思う。

二階から一日下りず詩人とか　西尾　栞

川柳というと私は「柳多留」のことしか知らなかった。その柳多留を鑑賞して楽しむのに、多くの「古川柳研究家」の労があったことを、今度はじめて知った。また、「川柳」という「俳句」とは根本的と言ってよいほどの違いのある短詩型が今日もまだ根強い実作者が多くいて支持されているのには、井上剣花坊、阪井久良伎らにはじまって明治、大正、昭和と今日までの数多くの先人達の真率な精進と試作とがあったことを知った。作者は大阪府八尾市在住。麻生路郎の門、句集「水鶏笛」がある。作者の代表作ではないが、自称、他称の詩人を諷して、古風だが私には何となくおかしい。

向こうから来る人があり人の世は　時実　新子

昭和五十年から現在も姫路市から「川柳展望」を発行しつづけている時実新子は、川柳という文学形式に打ちこんでいる当代の代表的な作家の一人で、最も注目されているのだという。右に引用した句など、前衛俳句とかまた例えば山頭火、放哉、井泉水などの短詩形に似たところがあるが、単に季語とか切字の形式上の問題だけのことではなく、俳句は発句からの独立、川柳は俳諧の「雑の句」からの自立と言った発想上の根源的な違いが歴然としている。そこが私には面白い。もっとも、私は種田山頭火など川柳として読んでいる。新子は、一九六五年発刊の漫画雑誌「ガロ」に登場した、つげ義春の劇画が好きだという。

汗顔の至りと涼しい顔を見せ　村木　碧水

「神社暦」というのがある。東京都神社庁選定になっていて、お正月になると、神社が氏子に配ってくれる薄い冊子で、私は毎年重宝している。便利なカレンダーである。それには「一白水星」「二黒土星」「三碧木星」などとその星にうまれた人の、その年の月々の運勢が書かれている。またその短かい文章には、必ず「川柳」が引用されている。有名な人の句もあるが無名な人の作品もあるようだ。

世の中は厭だと飯は三度食い　花川洞

欠勤と覚悟ができて飲み直し　則子

まだまだ、川柳漫歩のコラムが沢山あるが、紙面の都合で次の機会に譲る。

茲に岸本吟一さんに厚く御礼申上げる次第である。

川柳塔十一月号

座右の句

天牛の棚を見上げる長い顔　（栞）

私の句

美しい空想横の詩が邪魔　坪田冬花

川柳塔　十一月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

ある「コラム」……西尾　栞…(1)
年齢の外に居るべし……水粉千翁…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾栞選…(4)
■川柳太平記(42)　狂句追放運動始まる……東野大八…(24)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（四丁）……(26)
〈特集〉後進にのぞむ……好郎・甲吉・茶仏・大八・日満…(28)
多久志・久米雄・緑之助
水煙抄……正本水客選…(34)
秀句鑑賞「同人吟……野村多茂津…(33)
　　水煙抄……恒松叮紅…(45)
愛染帖……橘高薫風選…(46)

年齢の外に居るべし

水粉千翁

今年も老人の日が過ぎた。十人に一人が老人という。その中の一人として考えることは決して老人であってはならないということである。それは老人を意識しないということでもある。

年輪の太さは風雪を凌いだということに異議があるのではない。ただ年輪を誇張してはならない。いつまでも若いという〝負け惜しみ〟を持つことである。

今年も川柳町弓削の西日本川柳大会に出席した。三百数十名という出席は理屈抜きで川柳界最高の大会がくり返されているという事実である。さすが川柳のふるさとでもある。

弓削は三十三回大会という年輪には見向きもしないで川柳発展のために町ぐるみで日夜努力を惜しまないという、たくましい意欲を失わないことが、そのすべての若さであろう。受付から閉会までの隙のない運営がそれを物語っている。弓削駅前の路郎句碑はいつここ

秋つれづれ……西山　幸……(49)
■書評　川柳読本　岩井三窓……橘高　薫風……(56)
「相　談」……菊田いさむ選……(50)
一路集「　底　」……川村映輝選……(50)
「仮　面」……福田保子選……(51)
初歩教室……本田恵二朗……(52)
大萬川柳「出逢い」……川村好郎選……(54)
柳界展望……(57)
56年度川柳塔社同人総会……香川酔々……(59)
二賞発表本社十月句会……那須鎮彦……(60)
一分間の柳論……石垣花子……(63)
各地柳壇〈佳句地10選・板尾岳人選〉……(65)
編集後記……薫風・酔々・鬼遊・史好……(71)

座右の句

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ　（葭　乃）

私の句

真実を求め欺瞞の中に住み　小笠原　有　里

を訪ねても、莞爾として川柳の行方を見つめているようである。川柳町の発展を通じてである。

帰途寸時、定金冬二さんと久闊を話した。相変らず最高の知事賞に輝く冬二さんに「衰えませんね」と云うと、彼は「もう年齢だと思うし、ぼつぼつ駄目かなとも思うが、今年も又自信がついた。これならまだ行けそうだとも思う」と言う。川柳の鬼と云われ、川柳界の鬼才である彼の謙虚なことばの中での並々ならぬ努力のほどがうかがわれて、決して齢を自覚せず、絶えず若い者に挑戦しようとする迫力を感じた次第である。願わくば川柳人はいつまでも年齢の外に居ることを心掛けて、年齢の重たさの中から若さを失いたくないものである。

私が宮仕え以後、貧乏暇なしの日々が既に十数年続いているが、それは幸いにも病気をしないということに救われていることは謂うまでもないが、貧乏であることが最たるもとでのようにさえ思えてならない。満ち足らない者の生き抜こうとする意欲に支えられているとも云えそうである。この年齢になっていまだ一度も老人会へのさそいがないほどで、正に微苦笑もので、心中快哉を叫んでいる次第である。暇のない奴は相手にならんと見くびられているのである。適当な思考力を支えに年齢の外で川柳と同居したいものである。

川柳塔

西尾栞選

降ってきたよろこび話が前後する　堺市　高橋千万子

釣り針のこわさを金魚知らず生き

本人が来たのに判がちがいます

泡立ててたてててひとりの洗いもの

一枚を破れば暦秋の色

スタミナの料理に飽いて胡瓜もみ　八尾市　高杉鬼遊

酒を恋い女を想う白い馬

年金の記事が気になる秋の風

豪邸の窓ではないが金木犀

辞書をくる生活は金に背を向ける

松茸を食うた話を聞いている

結跏趺坐シルクロードに疲れたか　尼崎市　黒川紫香

手話と手話電車の中を明るくす

時間表持つと放浪癖が出る

姑の鼻緒ゆるめる嫁が居て

よう笑う仲居なかなか酌ぎ上手

遠くから部長のあくび見てしまい

但馬の平家部落を尋ねて

原始林の中で平家の血にふれる　寝屋川市　江口度

自転車のしつけを市長考える

赤トンボ運動靴を買いにゆく

名月や影絵遊びをはじめよう

不況時の重役少しヒステリー

大き目の袋をいつも持たされる

退院の日の点滴はかぞえ唄　八尾市　宮西弥生

足長い若さが列島狭くする

米櫃が満ちて祭近くなる

芸術の秋へ女たちまた裸
横文字が過ぎたある日の自己嫌悪
燃えがらを抱いて女はくずれない
男も女も寄り道がある青い月

和歌山市　垂井千寿子

活けられて日向葵向く方考える
千円の八卦で買える幸の枠
裏の列でカンナの赤の無節操
眼鏡のくもりパンのみに生き
幸も廻り舞台に乗ってるさ
どたん場で予言者が消えている

竹原市　山内静水

血の絆しみじみ想う〝おかげさま〟
指切りをした約束に寝つかれぬ
万事窮してひとりいた女友達
返事を待つ電話が恐い夜をひとり
月が出ていたらと思う竹の里

今治市　長野文庫

盆幾度やはり上等兵のまま
好きでなりましたと人間文化財
跨いだ気だったが老化けつまづき
凝る趣味があって老化の歯止めする
夏も冬もおんなじ造化ひとり者

今治市　月原宵明

釘さして置いたと言うに釘が無い
酒飲まぬ男は薬ばかり飲み
くさめした時から合のものに替え
秘書室に勤め男が馬鹿に見え
義歯とった寝顔観念した姿

倉敷市　野田素身郎

峠越え付添いまぶた重くなる
長期療養どうせ窓際族の僕
熱に耐え痛みに耐えて夏終る
病室の窓しみじみと昼の月
退院したら自己防衛に徹しよう

桜井市　岩本雀踊子

嘘をつくことも人間美学かな
風上に立つと男臭くなる
夫唱婦随妻の知恵が先走る
拳になる五指の力はあなどれぬ
雑兵の父の寝息にある平和

大阪市　川口弘生

万物は流転遺跡の月青い
月へ行く時代に占星術がもて
高麗尺で測れば高安城浮ぶ
避妊まで決めて雌猫飼うと決め
今日あって明日があるとは言えぬ核

大阪市　金井文秋

大当りはないが無難な道を選る
街頭ビラくれるあたりのビラのごみ
石橋を叩きブームに乗り遅れ
すがすがしい日だ朝顔のよい機嫌

環状線ひと廻りして酔いがさめ　八尾市　香川酔々

天気図は快晴ぶどうよく熟れる
朝市と川の流れのいい調和
連綿と女系が続く白い壁
エスカレーター一期一会の証しです
芸人の町高速に見下ろされ　青森市　工藤甲吉

建前は非核三原則の国
台風の跡を政治家ウロチョロし
行革の非情年金までケチり
ちんまりと柩に入り易く老い
釈尊の死んだ姿で昼寝する　倉敷市　水粉千翁

心画く筆に私を犯されず
下駄はいて冷えゆく秋へ話しかけ
土付けて大根の肌だとおもう
もっともな話拳で聞いている
さてペンを持って途方にくれる秋　高槻市　若柳潮花

万灯会無縁さまにも灯がともる
栗の実へ小さな秋が夕焼ける
一と口の酒でも肩をたたきあい
地獄には降りて行かない蜘蛛の糸
爆ぜる日を真赤に燃えて待つザクロ　藤井寺市　児島与呂志

病んでから弱気になった妻の指
秋に咲く朝顔私に似ているよ
八方美人こんなにしんどい日が続き
下駄履けば土が生きてる秋の音
失敗に地味な心をのぞかれる　鳥取市　河村日満

言い負けておらず妻の座五十年
悠々自適いつ死んでもが云える幸
棚に触れさせて必死の蠅叩き
もう飼わぬげんまん金魚鉢仕舞う
悼 佐伯越子さん
いのちある句があり安堵した旅か　和歌山市　野村太茂津

葵水忌や飛び込み台に立ち戻る
化けて出て慾しいと思う活字追う
墓参り一人で来いという葵水
星が降る君に言うことたんとある
葵水忌や無口に昏れる救いかも　倉吉市　奥谷弘朗

隙間風ふさぐ役目の妻が居る
足許が宙に浮いてる理想論
ほどほどを心得ているねだりよう
反骨の父半生は自我を捨て
老妻に着飾る欲がまだ残り　岡山県　嘉数兆代賀

地獄絵の鬼に余生を誓わされ

踏み絵踏む甘い自分に勝ちたくて
余生なお靴の重さに負けられぬ
正直に歩けば上に馬鹿がつき
飛んで来た吹矢は受けて立つ構え

岸和田市　高橋操子

乳房吸わせぬ子に母などと呼ぶなかれ
親不幸ガラスの乳房より知らぬ
床しさは和服の儀式わきまえる

岸和田祭

試験曳きの地車へ街中もう総出
灯がゆれて街中ゆれる祭の夜

島根県　藤井明朗

虫が鳴くそぞろ身にしむニュース聞く
水よごれ藻の行末も住みにくし
アパートの朝起きるひと眠る人
霧が降る駅長ひとり山の駅
金の力で弱い味方をもっている

松原市　玉置重人

子が巣立ちもとのふたりの守備範囲
背信のその靴音のかろやかさ
日旺日妻のおしゃべりはずみだし
天衣無縫五百羅漢はみな仏
とても眠たいある日のラッシュです

羽曳野市　塩満敏

定九郎顔負けしてるヘアルック
痴漢ではないがラッシュの手のやりば
本好きになれと孫に本を買い
夏休みすめば台風活気づき
ハンカチの売場巨匠の作もあり

大阪市　中川滋雀

風は秋こころ見つめる鏡拭く
銀婚忌明けの品がきれいすぎ
住所録まだ奥さんの名で生きる
聞き捨てにできぬ悩みを背負わされ
ふんふんと聞く繰り言に乗りすごし

島根県　堀江正朗

音が絵になる想い出持つ強さ
しあわせは耳から少しずつ入り
揺れ動く心を正座して押え
肩の凝り七十才の頑固さと
喋らしておいて甲乙つけられる

島根県　堀江芳子

居つかれて困る仔猫に餌をやり
想い出がまだまだ続く姉いもと
気力試すように雑用迫ってくる
馴れてても気むずかしさに驚かされ
ひらめいた案も自嘲へ閉じこめる

西宮市　藤村〆女

落伍者もなく頂上の風に佇ち
父の自信明日へ仕事残さない
嫁がせて夫婦に無口の日が続く
ご苦労のほどはと口先だけの他人

ある日ふと無性に欲しい鬼の面
奈良県　村上春巳

校庭で泣いているのは男の子
伝言板書いて未練がまだ残り
朝顔の種子丁寧に取っておく
葉牡丹の種子蒔く土に汗が染む
目減りする貯金通帳しかと抱く
竹原市　小島蘭幸

木は千本一本の木を征服す
生命がひとつここにもあるぞ秋の天
年寄りの働き過ぎは咎めない
衣替えの度に妻肥えている
長女次女ピアノ置く部屋欲しい妻
富田林市　岩田美代

勲章の男の話がむし暑い
人づてに聞く人間は怖いもの
つけられた鈴に気づかぬ踊りなり
まっすぐに釘打つ嫁がいてくれる
ある焦り男の靴下ずれている
米子市　石垣花子

燃え盡きるあがきのような派手づくり
横断路規則を守る一年生
一人ぽっちにされまいと補聴器をつける
道ならぬ噂へトゲ刺す女の目
絢爛のドラマを見せて逝き急ぎ
米子市　八木千代

白い花天にあつめて雲の峯
職安へ辞表のいきさつまで喋べり
晩年の地図へ朱線を引く震え
蜥蜴にも赤ちゃんがいた秋の燈
それでも水を満して欲しい欠けた甕
米子市　林瑞枝

少年の序曲波止場の風に佇つ
思慮深く夕顔愛を悟り切る
半額へおしゃれな主婦の知恵がある
ゲルニカの帰郷世界の祈り抱く
捨て切れぬ函想い出が積め込まれ
京都市　都倉求芽

夫婦間でも打合せの足りぬ嘘
但し書みたいな職業で世を渡り
傘振って振って失意の雨の日をたたむ
対角線に息をころしてエレベーター
格言の両面作戦にしてやられ
倉敷市　稲田豊作

事勿れ主義で味方も無いお人
歳月や男もネックレスをつけ
別居さす別居させると嫁探す
昼の月見てると恋が薄くなる
諦めが老いの拳の中にある
出雲市　原独仙

省りみる明・大・昭をよくぞ生き
勝てばなお負けても巨人にある人気

苦労して瘠せた女体に天高し
秋深く文学少女なお孤独
めでたさの極致よ吾等ダイヤ婚

伊丹市　樫谷寿馬

ひょっとこの面を斜に秋の風
マスカット一つ含んで秋へ旅
登り窯の煙と出逢う秋の雲
ツーダン満塁へ秋の空高い
来年を想うか秋の熱帯魚

松江市　柳楽鶴丸

遊びの方ではエリートコースです
イモをたべると戦争の話になる
知らぬが仏そんな生き方は出来ぬ
不可能と云えば挑戦したくなり
善にも悪にも正直なコンピューター

竹原市　森井菁居

雨に逆えばみじめが増すばかり
遺書を持つ男に恐いものがない
妻の意地女だてらと思うまい
切り札を出せば私の負けになる
紙コップひょんなご縁を不思議がり

鳥取県　川崎秋女

遠回りした人生だ急ぐまい
挑んでる姿のままの冷凍魚
爪とがぬ猫は序列から外す
お茶漬の音サラサラと生きている

ノーパン喫茶これも彼女の生き方で

和歌山市　若宮武雄

生き抜いてよかったナーと思う今
金婚の日へ折れまいぞ夫婦箸
こぼれ種土の温みに報わねば
男なら酔わねばならぬ祭酒
一面を見捨てられてる落ちこぼれ

島根県　西村早苗

果てしなき空のひろさよ秋ひとり
火を焚いて昨日の嘘をくべてやる
石蹴ってまだ興奮の余韻抱く
職ありて老いのめがねを二つかけ
ある和解言いたい言葉ひとつのみ

八尾市　大路美幸

かたくなな瞳をコスモスにわらわれる
メンバーに石松も居る俺も居る
火を抱いて生きた女を何故笑う
やりすごす術も覚えて五十才
旅立ちの母へは涙の釘を打つ

八尾市　飯田悦郎

核心に触れずしつけ糸を取る
騙し船紙一枚に泣かされる
産声の指は未来を握ってる
親切な男の顔は見たくない
人並の乳房していて気に入らず

大阪市　西森花村

マジシャンもスリも綺麗な指でした
下の方が冷えます水掛け地蔵さん
領収書の割印夜逃げしたそうな
ハイソックス上皮むけたように脱ぎ
常備薬能書よりも飲んでみる

大阪市　江城修史

帰省子を送る心に切り火する
忘却の影をまとめて六十路行く
ドラマめく命の胸に抱く墓標
居職の灯ひそと噂の外に住む
世渡りのずるさを知らぬ父で生き

大阪市　本間満津子

子離れはしていた筈を虫の音よ
手探りでちいさなローソク灯を点す
失うた光のくれたよき出逢い
握手してほしいと思う手が出ない
デスマスク優しい顔でという願い

大阪市　津守柳伸

他人の手借りるとけつまづくレール
天職が五十女の我を育て
豊作の案山子が好きなモーニング
廻り道しても女の自尊心
産ぶ声がもう戦いを宣言し

富田林市　和田維久子

悲しみをまぎらす鈴を高く振る
亡母の帯あの日の倖今一度
逆転の一歩手前で亡母の顔
母の墓標へ声なき声が続く朝
オーデコロンに酔わす男の色眼鏡

和歌山市　松原寿子

黒髪の先に女の修羅がある
優しさが怖いおんなにある孤独
秒針を止めても其処にある別れ
不意の孤独を優しく包むコンパクト
答はひとつ熱い瞳は裏切れぬ

和歌山市　西山幸

過去はみな絵になってゆく走馬燈
一葉を繙く夜もありおんな
落雁を噛んでしみじみと独り
完成へ小さいネジが見つからぬ
きしきしと軋む轆轤をまわしてる

堺市　大道美乙女

田舎道思い出消したアスファルト
脱線をする程翔んで見たい夜
逆境に人のこころの裏おもて
左せん地で噛みしめている宮仕え
強がりも程度があると子が叱り

奈良県　上田翠光

限りなき命子があり孫が居る
孫のような娘を女としてみつめ
しわくちゃの手と手に通う血もあらん
少さ目に草を束ねるのも歳か

干し草の匂い牛飼う手の匂い　兵庫県　辻　文平

煙草断つ決意乱れる祭の灯
病んでなお一口多いと叱られる
妥協への道を残している余白
君の持つ眼鏡明日が見えるかい
サヨナラが言えずに話す小半日　京都市　山本桐下

期することあってめがねを買い替える
婦人科へ行った女の立話
食欲の秋に揃えるえのぐ筆
罪洗う経に厳しき滝の音
よろこびに悲しみに花売られゆく　西宮市　杉浦婦美子

きざみ葱厨はすでに秋の音
裏切りを知らぬ小指は少女の詩
孫訪えばリカちゃん人形の客にされ
安穏な暮しの日々をふと怖れ
人の世の柵から逃げてみたい日も　大阪市　那須鎮彦

玄関の靴は明日へ向けてある
無気力になるまいとして無力
亡父母へ敬老の日の墓参り
思い出を深くさぐると友に会う
俺は獏とりとめもなく夢を食う　松江市　小林孤呂二

打たれる釘ならいちばん太い釘になる
階級を言われて黙す日がながい
XもYもZも恐怖文字
久し振り楽しきことへ触れたがる
騙されやすく無口でとおす太郎冠者　富田林市　板尾岳人

三枚の遺書に余白が飢えている
咽喉涸れて三一八〇米人殺し
三尺の鎖と影が重くなる
尾てい骨笑うと夕日悲しげに
登山靴山から下りて妊ごもれり　東大阪市　市場没食子

春夏秋冬鉢に咲かせて老夫婦
八月十五日何んの日だかも知らぬ層
不精髭いいえ縁起をかつぐ髭
ポケットベル店主も第一線に立ち　兵庫県　遠山可住

通勤の電車に指定席がある
秋を飛ぶトンボの数をうれしがり
腐りかけのりんごを一つまけてくれ
元の二人になりふるさとへ足が向き　下関市　国弘半休門

核家族燕貴公も巣立ちかね
小便に起きて月見る忙中閑
商才で仕入れ士魂でよう売らず
漬け物の味で老妻親しまれ

食うて寝て起きてウロチョロ七十年　鳥取県　鈴木村諷子

あわてずに眠るが如くその時は
虫が啼く生きてることのすばらしさ
円いコップに注いで円い水をのみ　高槻市　福田丁路

秋草の花咲く丘のブルトーザー
温泉の湯衣で拝む地蔵尊
台風の予報外れた流れ星
菊薫る朝を彩る赤とんぼ　今治市　越智一水

鈍才の夫婦と言われむつまじい
振り向かぬ後姿に掌を合わし
子ばなれへ老後語るも秋なるか
萩の庭話はずんで茶がさめる　鳥取市　小林由多香

常習の遅刻と遅刻門で会い
職安へ今日は求人票を書く
冷害をなげく案山子の足が冷え
夜更かしを叱る歯ブラシ滑らない　宝塚市　傍島静馬

一張羅本人だけが悦に入り
立ち際のよいしょを孫にからかわれ
一を聞いて十知る小才をあぶながり
うまそうに紫煙輪にふく王手飛車　生駒市　草深酔升

海山の御恩は金で済まされず
老いらくの今日とて励む自画自賛
健脚の自慢も老いの語り草
叱らねばならぬ吾が身がなさけない　岸和田市　福浦勝晴

たったいま飛んで行きたいような月
気の弱いところと無口が親に似て
敗戦のどこかで眺めた赤トンボ
うまずめと独りで決めて焼く秋刀魚　神戸市　中村ゆきを

七光りやっぱり人情にけつまづき
会釈してどなた様やらふり返り
王侯よりプライド持てり弱者の死
人生の転機に力が合う家族　松江市　恒松叮紅

古い町意固地な人が住んでいる
老人会ここも元気な人ばかり
別居して嫁の意見につい押され
中年の夫婦で皿が一つ割れ　平田市　久家代仕男

棟梁の思案鉋を研ぎながら
聞き辛さ話を避けて酒を待つ
黄昏に川の流れの後や先
累代を耐えた古材の篝火よ　大田市　藤田軒太楼

熟年の徒然水やる鉢も殖え

通り雨ですよと慌てぬ野球狂
田園の朝エンジンの音で明け
積木つむ高さに孫の育ちみる

柳井市　弘津柳慶

出不精になってゴロリと週刊誌
一周忌仏の過去のエピソード
多数派の右へ右へと動き出し
膝枕しばし世ぞくを忘れさせ

美祢市　安平次弘道

人形になりきっている腹話術
やさしさが仇逃げてゆく勝負運
郵便受けの雅号根づいてきたか趣味
青空へ赤風船の自己主張

奈良市　森田カズヱ

うす化粧して看護婦の深夜勤
参道の香具師もとばしたゴム風船
貰い犬三日を啼いて居つきけり
胎動に児は人権をずばり云う

大阪市　清水健司

心ない口が勝手に動いてる
皿割って終りにしとく気の弱さ
息子にはくすりになった負けいくさ
追及はしないで明日を見てやろう

宇部市　平田実男

人気者妻と名乗れぬ女がいる
酔って乗るタクシー代は苦にならず
賭けてないマージャン真昼の月に似る
同じ柄やはりむこうも振り返り

大阪市　藤田頂留子

こおろぎが般若心経和してくれ
年よりの今日に自分の明日を見る
共食いの商店街はビラ合戦
まだまだと想って居るのは自分だけ

兵庫県　河原みのる

教科書を叩けば紙幣が出埃が出
附き添いの婦警仲人してみたく
無料やから薬時々のみ忘れ
八十の気持でいたりいなんだり

奈良市　宮口笛生

雷も派手に暑さの抜ける雨
よくしゃべる男で酒の匂いする
それからを話たがらない女の目

妻入院

よくねればねるで看病ねむられず

大阪市　天正千梢

競う心失せてはならじ土用波
宿の下駄孤独を捨てに行きたがり
一人よがりへ灸をすえている読書
老いゆかば形なきものほしくなり

松山市　谷真風

糟糠の妻亡し漬物噛む歯なし
剣道の先生癌には勝てなんだ

片付かぬ事のみ余生流れゆく
稲光り遠く戦う国がある　神戸市　仲　どんたく

秋風に急かれて毛糸の目を拾う
抵抗の限界男知っている
クイッククイックスロー老いの持ち駒すり減らす
間違いであれ逆縁の訃に出会い　寝屋川市　宮尾　あいき

月見草月も出ぬ間に摘み取られ
釘一本打てぬ女の顔でいる
サソリ座と云うからきつい女に見え
小さくても虹を抱いてるしゃぼん玉　米子市　小西　雄々

佐伯越子さんを悼む（一句）
訃報聞く窓辺に一つ流れ星

地図どおり進めば道路工事中
ライバルへエンストなどはしておれず
折角の化粧へ素顔が好きという　倉吉市　渡辺　菩句

薔薇切って血がしたたるかと思う
一匹の泣き虫で墓洗うてる
蜘蛛の糸に頼るな自問自答する
あしたという未来へ蔦ははい上り　姫路市　植村　客遊子

夏休みすんで宿題だけ残り
送り火へ今年二十才の娘を偲ぶ
家中がバラ色快気祝う膳
御家訓をすぐ楯にして祖母達者　東大阪市　斉藤　三十四

四書五経繙く灯火秋ふかむ
始末書へ親切そうに椅子をくれ
古希近くまだ脱線の夢をもち
角隠し外せばビール強そうな　鳥取市　清水　一保

街角で今日はナースでない笑顔
へんなのが来たと土星の輪がさわぎ
もうあかんあかんと波に乗る強さ
闘いの日々に優勝戦がない　倉敷市　藤井　春日

何時の世か幸来ると針運ぶ
人恋酒好きで飲んでる訳で無し
部長昇進妻はさほど喜ばず
想い出があるから演歌胸を突く　倉敷市　小幡　里風

露ほども知りませなんだと小さい嘘
ジョギングの靴がけちらす朝の露
ようついて来たなと金婚妻と酌み
有終の美へ金盃の尚美しく　諫早市　原田　明春

ペットには肉　俺は茶漬でほっとかれ
福祉記事紙面のすみに一二行
幽霊もとまどっており墓地団地

見合では鼾かくとは聞いとらず
和泉市　西岡洛酔

善人の印半てん父も老い
婦唱夫随もうあきらめの歳に居る
夏バテと医者カラカラ笑うだけ
足組んだ脚線日本人と云う太さ
堺市　藤井一二三

鬼ヤンマ男を意識させて翔ぶ
逝く夏を惜しむ若さが怨めしく
だまし舟哀しい性の手が握る
生きている証し今宵も爪が伸び
大阪市　河井庸佑

先様も右と左を提げ比べ
実力はこんなものかと諦める
追い込んで差し切る自信張らせ
四面楚歌耐え抜くことを身につける
橿原市　岩井本蔭棒

吸い上げて軍艦マーチで送り出し
犯行を見ているだけのお月様
コーヒーの値段へ米を置いてみる
緑蔭のデートへ毛虫ぶら下り
鳥取市　両川洋々

出世へのキップ欲張る手から落ち
一匹になると赤鬼だって泣く
返り血を浴びて因果な役を終え
決断を迫るポケットベルが鳴る

島根県　小砂白汀

束の間の日射しを芝生しかと抱き
陽が登り宵待草がてれくさい
ネジ巻いてほどけるまでのドラマかな
どこをどう来たのかカマキリ痩せほそり
島根県　榊原秀子

充実の日々余生とはいわせない
お休みと手脚を伸ばす今日の幸
野仏が泣く夏草の生い繁り
夜明け待つ枕ねがえり幾度か
島根県　大森孝華

帰省の娘残暑の風にうながされ
雲行きへやはり言えない金のこと
語り草抱いた日もあり孫は伸び
人哀し田舎の町へまい戻り
鳥取県　林露杖

夕映えに挑みサルビア燃えたぎる
龍舌蘭されど健気に返り咲き
真実の愛なら憎悪とはならぬ
念力が欲しいこちらを向かせたく
和歌山市　内芝登志代

力水つけて明日の強敵だ
憎まれ役買って出る程成長し
糠袋はなさぬ老母のきれい好き
廻転木馬脱線したい日もあろう
和歌山市　浦野和子

こんな時気さくにさよなら云えたなら
おきばりやす肩にうれしい京言葉
頑張ろうしろの正面鬼が居る
本題を外れて話術が冴えてくる
和歌山市　福本英子

水ポトリポトリ男手の無い世帯
ああ平和水盃は伏せてある
針錆びてキーパンチャーのまま嫁ぐ
百日紅真紅に炎えて病んでいる
和歌山市　坂口公子

めくるめく秋野に言葉など要らぬ
背信がゆれて哀しい水鏡
足らぬだけとってくるとは里の家
さし水の過ぎて花の香うすれて来
高知県　松岡三吉

不覚にも女房が塩を切らしたり
晩酌の二合は夫に無駄でなし
良心があって急所にふれずいる
いて無色居なくて淋しい夫婦なり
岡山市　川端柳子

よろこびが覗いているよ糸切歯
もう泣かぬ女になるは何時のこと
そこ〳〵のとこでがまんの幸を持つ
虫の声一直線に過去が生き
神戸市　山口美穂

虫の声きれぎれ長い便り書く

疑いが消えない夜の孤独感
サングラス泣いたあとなど見せられぬ
萩の露ひとときふれるやすらぎに
羽曳野市　榎本吐来

ライバルのここにもあった縄のれん
勝ったなと思うところで妥協する
銀婚をわが家のことと指を折り
会ってからもう夢に出ぬひととなり
大阪市　村山光輪

梅酒を仕込んだ年を見せて注ぎ
梅酒を呑むにも歴史聞かされる
おどり食いする程通にまだなれず
通し矢の三間堂に秋の雨
鳥取県　金川満春

毒虫も生きる権利の毒を持ち
障害年生きる権利を押出され
年上の女に溺れた懐古談
中心を外して和解の歩を進め
島根県　木村はじめ

一言が多くて味方又逃がし
年金で微々たる好日今日の酒
本当は歩であり金の貌をする
冷房にしたかと碁仇上りこみ
松江市　舟木与根一

兎の居ない月見だんごとは淋し
おっちょこちょいのとこが良いとは第三者

非の打ちようがない司会で肩が凝り
退職金満場一致で追い出され　富田林市　和田維久子

（前月追加）
老と云う避けて通れぬ鉄格子
声なき声交わす墓標に秋の雨
美しい嘘を入れとく旅日記
禁断の園はむかしの夢のゆめ　青森県　五十嵐操史

（前月追加）
初恋を実らせる智恵展開す
老いらくの話題素早くあっと消せ
サラ金に助けられても敵視する
禁酒薬胃薬に化けて呑まされる　岸和田市　福島せつ子

口つむぐ男のゆとり五十年
子がみんな去んで淋しい台所
帰省する車は夜中に発つとする
しのびよる秋の気配へ軸を替え　岸和田市　原さよ子

操子師の句碑（一句）
満開の萩も静かに句碑語る
恵まれた五体へ高い低い云う
うちの子も外交無碍に断われず
何もかも努力が足りぬ自己嫌悪　笠岡市　松本忠三

耳医者にとんちんかんな返事をし
参加することに意義ある負け惜しみ
本堂の鼠佛の慈悲をうけ
団栗の仲間となって評価され　京都市　山本規不風

独身貴族で親不孝には気付かない
深爪を切って再婚あきらめる
時々は情けで雷鳴ってゐる
子には傷見せず女は祈り持つ　松江市　梅本登美也

満ち足りた姿親子のニラメッコ
稲光り短気な雨を連れてくる
姉妹がおんなじ人を視野に置く
議員数減らすどころか歳費上げ　三重県　川上渓水

落石注意！どんな注意をするのやら
厳しさの尺度も父母という長さ
出稼ぎの耳にやさしい国訛り
床の間に置けばバーゲンには見えず　寝屋川市　柴田英壬子

リンスして髪はまだまだ濡羽色
名月の宴へ仮面などつけぬ
貸すことも借りるのも避けさんま焼く
つつましく主婦広報の市政読む　海南市　牛尾緑楼

子の為にひたすら善を積みつづけ
浮草の努力を風があざわらう
学歴は定時制卒社長の座

本音にも裏表ある年の功　兵庫県　藤後実男

原爆忌忘れた空へ鯉幟

楽屋裏脇役ばかりの気が揃い

天職を守り抜いてる深呼吸

お休みと寡婦が少し距離を置き　富田林市　中村優

忍耐の吾より先に人が吠え

どの連もスター気取りの阿波踊り

銘木の艶を老父の顔に見る

千人針縫うた日もある糸切歯　大阪市　横地雅風

健康を願う社長の野草鉢

弁解へ誤解の妻の早い口

骨董に凝って素焼でお茶を飲み

この辺とそろばん置いている和解　大阪市　黒田真砂

休日の草とり幸と思う年

お手製の服手間程は映えもせず

結び目をたぐって女の生きる道

赤穂岬

宝殿の奇石が語る過去未来（石の宝殿）　大阪市　北勝美

台風一過不快指数を吹きとばし

両親とローン抱えて子が二人

ぜいたくを許してもらう朝の風呂

防災日恐い話ばかり聞く　岡山市　井上柳五郎

不機嫌とわかる回り椅子横を向き

死にたいが口癖老いが金を貯め

生きるためきょうを買われて男出る

未来図の借景を消すビルがふえ　岡山県　荻野鮫虎狼

再就職肩がだんだん丸くなる

国防の軍備を説いている平和

台風も鈍行で来る休み明け

斗争が済めば何処かで呑む話　守口市　野呂右近

人嫌いになりそうなので下駄を履く

虚々実々時に夫婦の対話にも

楢山寮ですとつぶやく人も居る

秋灯下老眼鏡の度が進む　出雲市　板垣夢酔

あやつっているから凧に張りがあり

侮ったカラスが泣いてる車事故

六法をたてに相続判しぶる

遮断機が下りて彼女を見失う　大東市　土岐トク子

わが痛み知るや知らずや桜島

素朴さを賞でふるさとに舌鼓

天文館西郷どんが生きて居る

酌み交す婿はつらつと笑うなり

胸を張る男に幸せ付いてくる　枚方市　水野　弘
天高く洛南道を独歩する
特別料払って手相へ喰い下り
一つでは足りぬ眼鏡の主となり　大阪市　神夏磯　道子
昨年の今日は何にも知らずいた
描いていた夢が大き過ぎただけ
後髪ひかせまい夫婦して歌う
手を洗うその拭き方に貴女知る　大阪市　柳原　静香
孫が来て夏休みらしくなって来る
柿の実はまだまだ青し法隆寺
種袋わけのわからぬ花が咲き
土鈴ふればかすかにひびく旅の音　大阪市　西出　楓楽
秋風が仕事の手伝いしてくれる
或る日ふと主婦にも欲しい労働歌
菜っ葉服似合う夫で従いてゆく
うれしくも吾子にかぶとをぬがされる　東大阪市　奥山　弥山人
お馴染みもつけのきかない程度なり
幕間の五分のリズム釘の音
炭鉱の昔を語る無人駅
最後にはお茶漬ねだる里の母　町田市　竹内　紫錆

耳つかむサイン読まれたスポーツ欄
吊皮も帰りは連れにこぼす愚痴
旧かなを混じえる人に張り切られ
消しゴムを一番減らす祖父である　西宮市　野呂　鵜汀
招かれて読めない軸を背に座り
金縛りになってノコ〳〵ついて行き
温厚な人で横皺だけの顔
遠くから来た人だけをもてはやし　米子市　青戸田　鶴
七月七日亡母との深さ身に沁みる
せみしぐれ野には野の風地蔵札
移り行く世のならいでも秋わびし
合宿の友情裸からうまれ　米子市　雑賀　美世
職安の狭さへ返す老いの足
血縁が逝って冷たい道となり
喉を病む友へ見舞も手話まじる
頑張った末に泣きつく父の膝　米子市　桑原　伊都
晩年へ空気の様な二人の歩
ガラス玉の指輪ひとつにあるドラマ
踊り手へ見よう見真似で列に入り
子宝へ揃った皿も欠けてゆき　米子市　菅井　とも子
窓ガラス磨いて病室広くする

結婚シーズンうちの話題も華やいで
本当のことは聞かずに娘をかえし
新調の背広で古稀の背を伸ばす　米子市　政岡日枝子

情熱の川病葉をみすてない
平安の埃も出て来る京屋敷
紙おむつ孫へおさめる育児論
三日前残りの夜を母と寝る　出雲市　園山多賀子

田舎町ふる里を持つ里ことば
屈託のない善人の足の裏
硝子戸を這ってとかげは腹を見せ
涙壺抱いて女は髪を梳く　東大阪市　崎山美子

脱線をして人生の機微を知る
脱線をする言い分けを教えられ
待合せの目印として立つ銅像
銅像へ昔を一人なつかしむ　藤井寺市　中原比呂志

観光のポスター裏切る天気運
ベタベタと広告貼って赤字埋め
教科書を書きかえ日本を塗りかえる
開店を祝いそのあと寄りつかず　高知県　赤川菊野

喝采をたまにはほしい雑兵で
駅弁をさげて孤りの旅帰り
愛憎の果てをテレビにあばかれる
満ち足りたひざにコロコロ毛糸玉　和歌山市　杉田周穂

引越しに白蟻だけを置いて行き
引越せば初恋の女近く住む
盆暮のつけとどきなき職にいる
母逝けば天涯孤独盆間近か　岸和田市　古野ひで

男下駄一足揃えて寡婦一人
寡婦ひとり哀しい歴史繰返し
包装も中味も立派で安堵する　香川県　岡田拳法

ゴジラでも頼むか非武装中立論
減反で米価が上がるあほらしさ
税を食う順に行革せぬ日本　大阪市　室谷徹舟

掘り下げて掘り下げて幸せを見つけ
施主として上棟式のビールつぐ
優勝の監督美味い酒を飲み　竹原市　時広一路

踏み込めば境界線が消えてゆく
他所行きの顔をするから皺が増え
花の咲く余裕なきまま伸び過ぎる　岡山市　時末一灯

妬ましい若さ自前の歯がきれい
外勤のノルマへ雨の横なぐり

盃を軽く貰って重い枷　玉野市　小谷仙山

胃薬のポケットに有る旅の空
萩　桔梗　田舎は遠くなりにけり
かまきりの鎌けなげにもけなげにも　仙台市　川村映輝

喜寿迎え諦め心叱咤する
仙台の秋の序曲は萩まつり
平年作去年の分まで湯治する　東大阪市　竹中綾珠

ねむられぬ耳に聞える夜の私語
足の痛みリモコンテレビに助けられ
今に行きますと墓の花変える　島根県　太田亀甲

ダイヤ婚連れ添うた妻の寝顔みる
遺言書涙一雫交ってる
てっぺんの朝顔咲かねばならぬ事にして　大阪市　西川善紫

目先のことだけしか言わぬ知恵袋
押入れのスペース生かす妻の知恵
糠漬に馴染んだ頃の茄子の色　貝塚市　行天千代

燃えさかる心にも似て彼岸花
幸薄き離婚の娘一人生き
老人会嫁の不足の捨てどころ　加賀市　細呂木魯木

人形にされて名士夫人です
活字になって近所にやっと知れ
消しゴムがほしい人生の一瞬間　岸和田市　清野こう

再会のよろこび老いの泣くばかり
駆けてくるチャンスをつかむコツがいる
船頭の竿にあずけている命　岸和田市　狭間希久志

根廻しを知った時から持つ不信
口止めの釘がだんだん重くなり
三文判ほどの軽さか我が人生　姫路市　大原葉香

日の丸がはためき小さな日本あり
爪染めて女は過去に口閉ざし
病み続け神の試錬に崩れそう　大阪市　神田秀峰

高飛車にくれば反撥腹の虫
死んでよい奴が長生きする時世
生命かけ守ってくれる人に嫁き　守口市　羽原静歩

嫁がせて大安の空ふとわびし
ワンバウンドさてさてこの世面白し
ワークアンドプレイ五分五分となるうれしい日　鳥取市　有田とし江

指先きの渦にトンボはだまされる
和紙人形作る女の彩を選る

毎日登山

感傷の私へ燃えてるナナカマド　鳥取市　岸本無人

三十度越す部屋の秋カレンダー
補助券の少し足りない〆切り日
潮満ちた深さで雑魚が追い出され　大阪市　欄蘭

松茸は一寸敬遠市場籠
ぐうたらで明日のギャンブル予想する
大阪に縁が有った蟬しぐれ　兵庫県　大江秋月

暢気そうに見えて疲れる孫の守り
座席とは荷物置くとこ婦人客
娘婿酒の相手に来て呉れる　青森県　五十嵐操史

母達者遠い里から一人来る
十五夜を讃える妻の顔の艶
夕食の団欒長寿お相伴　出雲市　吉岡きみえ

三十年合わせた歩巾にある起伏
腹割って話せば気まずくなる女
骨肉の愛もひき裂く金恨む　出雲市　石倉芙佐子

友だちの眼鏡を時に借りて見る
味方にしたい男がひとり居る砦
音の無い世界と真紅のバラが咲く　枚方市　稲葉星斗

仮面つけスーパーマンに憧れる
悪友とぱったり出逢う縄のれん
職安でノータイ同士が又出逢い　岡山県　岩道博友

幸せはいつものパターンで螺子が切れ
花鋏初秋の夜に生きた音
好き嫌い言うて仏像見る婦人　河内長野市　井上喜酔

鉢植も我が家の四季を美しく
人間のずるさが目立ち隙がない
大学を落ちて人間大きなり　羽咋市　三宅ろ亭

老人のグループ今日はどこへ行く
英単語使って孫を驚かせ
誰かあるなんて言えない核家庭　鳥取市　森田熊生

鳥かごの中で飛べない羽根を抱く
副業を考えてみる夜が長い
人気上昇個性を忘れかけ　唐津市　新岡回天子

大ぼらを吹いて引揚者一人逝く
グルリ灰碁のあとしまつ妻の愚痴　岡山県　直原七面山

最後の女と決めた女に家出され
恋を得た女に魔性の羽が生え

島根県　山根峰雪

左から云えば右傾となる教科書
不幸ではないと叫んだ障害児

浜田久米雄

ご馳走に違いはないが歯に合わず
酒だけがたのしみとなる古稀を越し
むずかしい言葉は嫌いやり過ごし
趣味の書が溜る未来を考える
数を減すわけにはゆかぬ年賀状

本田恵二朗

わらべ唄が聞えて来そうな星の道
真相は言わぬが花と逃げられる
不協和音突き刺す鶴の声冴える
これっぽちと思った因果がつきまとい
出るとこに出てなめくじに塩となり

正本水客

犬の眼にも疲れた帽子に見えてくる
不用意な笑いが平行線になる
結果論は云うなと正義無視される
女には香りの見える嘘がある
確かめて確かめて女あきらめる

尼　緑之助

まっすぐに秋が棲みこむ児のひとみ
ああ秋か鰻の昼寝藻の深き
背信の夢背な筋にしろい蛇
日旺の刈り入れそろそろ大儀がる
通り魔となる少年に秋の風

川村好郎

押せば来る寄せれば逃げるたらい水
起きているらしい夜更けの灯がまぶし
決算書税の行方をふと思い
加速度の罪を赦している葬花
古服よ私と昨日を話そうよ

若本多久志

雨の日旺　時刻表でも繰る旅路
老妻と交す言葉もない夕餉
孫たちの来る日すき焼も待っている
寅年の孫と気が合う俺も寅
手術までしての長生き敬遠す

西尾栞

きき役は舅がなっている平和
ゴキブリの家の戦果を老夫婦
妻曰ク悪い人ではないけれど
私達は大人ですよという返事
鈴虫に餌やりすぎてもう鳴かず

☆新年号特集☆

川柳塔社同人総参加（一人一句）

「私の一句」

今年中に発表されたもの

●締切　十一月二十五日着便まで

川柳太平記(42)

狂句追放運動始まる

東野大八

初代柄井川柳から連綿として継承されてきた川柳宗家は、現在十五世脇屋川柳ということになっている。明治に入って三十年代から展開された狂句追放運動の時点では、久良岐剣花坊の唱える、いわゆる「狂句百年の負債」のツケを突きつけられたのは、十世と十一世の二人である。

思うに川柳宗家の継承は、四世以降から実質的には狂句何世と称するのが正しい。だがその継承者の何人もすべてその肩書には、何世××川柳の襲名を忘れることはなかった。それ故にこそ「川柳」なる呼称は、現代まで享け継がれてきたわけで、川柳呼称の確立の実績は、それによって保たれた。

川柳が「俳風狂句」または「柳風狂句」の名において、その性格の系譜づけを行いながら、四世以降、狂句は八〇年の狂句宗家を唱え明治時代の十世および十一世に及んだわけだが、狂句追放の嵐を真向からうけることになったこの二人の立机点者に、一応、狂句追放運動の展開に当ってふれておく必要がある。

十世というのは狂句堂川柳平井省三。十一世が深翠亭川柳小林釜三郎（初号昇旭）ということに岡田三面子編の川柳史では扱われている。（昭和六年刊岩波書店版〝川柳〟）しかし、この両者の継承についてだが甚だ後や先でややこしいのである。

九世前島和橋は、明治三十七年四月の死に臨み、十世を継ぐよう後事を托したのが昇旭である。ところが彼は身辺多忙の故をもって辞退したため、明治四十年十月、平井省三が十世の宗家を継いだ。ところが同四十二年五月になって昇旭が身辺整理が終ったと称し立机を宣言したため平井は隠退する。ところが昇旭は大正二年病気のため引退を申出たため平井が十世名儀で再引墨した。昇旭は大正六年五月病没。平井はそのまま大正十二年まで立机し同年、老衰のため隠退し八十歳で死去した。そこで直ちに十二世を継いで立机するのが、碧流舎川柳小森元吉（柳霞楼和州）である。

さて話を明治十年発刊の「団々珍聞」の時点に還そう。狂句追放運動の触手は、この絵入り雑誌の出現にも起因するからである。

この団珍の柳壇は、本来なら七世川柳が担当するのが常識なのだが、団珍は戯作者の梅亭金鶴を選者とした。ところがこの選者予想外に筋目のよさで、後世の川柳人にも好評。

—五右衛門のうた辞世よりほか聞かず

—人並になると故郷を恋しがり

この柳壇の投句者にはなんと九世を継ぐ前橋和橋なのは意外であった。彼和橋は壮年時代から一種の新聞投書家で、往時の「投書家番付」では三役どころで名を残している。

和橋は狂句畑に珍らしいインテリで、壮年

期には「有喜世新聞」という小新聞の主筆をつとめ、九世を継ぐと狂句の機関誌「柳の栞」を明治二十七年十月に出している。その序文に「新調中の最新調句を載す」と宣言したものの、あまりパッとしたしろものに非ず。

—鼻下長の貫目は知れぬ金鎖
—待合の酒戦肱鉄砲もあり

金鵞は戯作が本職で、団珍柳壇は片手間仕事、このため明治十九年に、弟子の鶯亭金升に選者の座を譲った。しかし、この金升は八世川柳の立机ムードの盛況に煽られ、もとの狂句のバレ句選者になり下った。そして明治三十五年夏に「狂句の栞」「狂体句の栞」を著す。

ところでこれが出た年、中根香亭（本名淑）が、「文芸界」（金港堂刊）から画期的な「前句源流」なる一文を発表した。彼はその一文中に、初期柳多留の文芸的価値にふれ「その間、人情に適切なるもの多きを以て、聖人君子といえども、之を見てその妙を歎ぜざるはなき」と、柄井川柳を賞揚し、その末文に時点の狂句調を捉え「かかる遊戯三味の小文芸は、後来終に再来の期なかるべく、将た又敢て其の発生を希わざるなり」ときめつけている。まことに明察という他はない。

この「前句源流」の稿は、その二年前に注目すべき名論稿が姿を現わしている。蘆山梅本鍾太郎の「川柳難句評釈」である。この本には巻頭に、簡単な川柳史を記し初代川柳選の川柳点を高く賞揚し、その柳多留初期の名句評釈を試みているというもので、狂句界を大きく刺戟した。

蘆山はこの評釈をはじめ表題に「柳多留註釈」としたが、版本の文録堂主人が

「柳多留といっても世間で知る人は少い。随ってこんな評題では本は売れない」

とクレームをつけ、柳多留の名が抹消され「川柳難句評釈」と改変されて世に出たわけである。文録堂主人の文句の通り、柳多留なるものは天保十年に百六十六篇をもって廃刊されており、蘆山の評釈が世に出る年まで六〇年もの空白時代が存在した。とにかくこの梅本蘆山の著書が、純川柳再興の警鐘的役割を果たしたことは確実である。この著書の刺戟をうけ二年後に香亭の「前句源流」が出た。負けてはならないとこの年に、金升が「狂句」の栞シリーズで巻き返えしに出たという推測が成り立つ。これについて海野夢一仏はその「川柳史講座」（昭和十年交蘭社刊）でつぎのように述べている。

「柳多留といっても明治中頃まで殆んど知る者はなかったらしく、斯の道に在る者のみの知る書名であったろうか、明治初年より同三十年頃までに、柳多留の名を利用した図書は相当に多いことは、柳多留がそろそろ一般から研究され初めたと、観てはいけなかろうか

柳風狂句家内喜樽、宮島新柳樽、開花家内喜多留、絵本新柳樽（中略）明治新柳樽

等々、おびただしい数に上ってはいるが、画入本の飜刻ものであったり、或いはほんの二、三十頁の小冊子が大部分を占めており、その他の図書は出版されても単なる句集でしかなく、川柳も史的にまた句を内容的に検討したものはまず薬にしたくとも無かった」

また同書には古川柳研究につきこうある。

「明治になってから饗庭篁村、幸堂得知等の文人達は、時折、大久保紫香方に集会して誹風柳多留の句について研究を重ねていたがこれが柳多留の句の評釈研究した最初であったかも知れぬ。」ともあれ、狂句追放運動の口火を切った坂井久良岐の「川柳梗概」が金港堂の文芸叢書として世に出たのは「前句源流」出版の翌年、明治三十六年九月二十二日（初世川柳忌の前日）であった。

誹風柳多留廿六篇研究（四丁）

南　得二・小野真孝・本多正範
石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木　黄・石田晋一・多田　光
故岡田甫

57　**本所に弐三字京に一ヶ字也**

南＝本句「字」とあるは『仮名手本忠臣蔵』のいろは仮名文字である。

「本所に弐三字」は、江戸本所松坂町吉良邸の附近にあって動静を覗う義士達である。

一字ツヽ化て屋敷のやうすを見　拾六・3

「京に一字」は京山科に閑居する御大、大石蔵之助。

かな手本いの字ハ京にわひ住居　四二・32

で本句は討入前の義士の配置をいった句。

本多＝義士のうち本所には、相生町に前原伊助、神崎与五郎、徳右衛門町に杉野十平次、林町に堀部安兵衛等が米屋・剣術師範等に身を変え、偽名を名乗って居住していた。これ以外にも同居住いする者もおりで、「二三字」どころではなかったことはご存知の通りです。

多田＝賛。

岡田＝同。

58　**禁酒だとおっしゃりませと袴腰**

南＝「袴腰」は袴の背後、腰のあたる部分。男子用には、中に梯形の腰板が入っている。兎かく酒の上での失敗の多い御亭主の外出の為めに袴腰を当てながら嫁が禁酒をすすめている。艶な家庭風景の一齣。

だらけずに廻ッて来なとこしをあて　七・6

多田＝ことばづかいからすれば、「禁酒だと」の方は武家か大町人、「だらけずに」は庶民のように取れるが、そう限定しなくてもと思う。

岡田＝同。

59　**風鈴の短冊読メる暑い事**

南＝油照りのなんともやりきれない日中、煮えかえるような暑さ、風ひとつ無いので、軒下の風鈴に下げられた短冊が静止して、そのままで読めるというのである。

まっすぐな柳みて居るあつい事　一二・23

風鈴を扇でならすあつい事　二八・32

多田＝賛。

風鈴の音をよってる暑い事　安五宮2

―「撰ってる」引っぱって鳴らして見て音のいいのを買う

岡田＝賛。

60　**北ハ金南ハ絹て橋をかけ**

南＝幕府の金座（後藤光次）が橋の北なる金吹町にあり、同じく幕府の呉服所なる後藤縫殿助の住居が橋の南呉服町にあって、後藤（五斗）後藤（五斗）の秀句により、一石橋と名付けたと伝える。

はんじゃうさ金と呉服で橋ができ　四八・4

本多＝賛。一石橋は八橋、八ッ見橋ともよばれる。

多田＝賛。

数万石たった一石橋で見え　七七・14

岡田＝同。

61　**雲長と宗祇和漢の髭おしみ**

南＝「雲長」姓は関、名は羽、字は初め寿長のち雲長、三国志の英雄。曹操の宴に招かれて、紗の錦二ひきをひげを包む袋の料にと賜わり、それによりひげが下腹までとどく位になり、美髭公とよばれるに至る。

「宗祇」は、足利時代末期の連歌の宗匠。この宗祇が箱根の山賊に出逢って、路銀衣類は与えたが、白い髭を求められて、

わかために払子ばかりは許せかし
　鹿の浮世を捨て果つるまで

と詠んで難をまぬがれた。

本句は漢の関羽雲長、和の飯尾宗祇の愛髭家を対比させた句である。

多田＝賛。

岡田＝同。

62　**歌枕たけ興津をば寝ずにたち**

南＝「歌枕」は古歌に詠みこまれた諸国の名所。「興津」は東海道宿場の一つ。現在、静岡県の中央に位置する。

本句は、興津を起きつと洒落て、歌枕・寝ずの縁語仕立。それだけの句と思います。

多田＝賛。「此道は山水の風景真妙にして東海道第一の勝地なり」（『東海道名所図会』巻四）。『十六夜日記』にも記されている。鯛と興津を結んだものは雑俳にもあるが、歌枕と結んだのは珍しい。

岡田＝諸説に尽く。

63　**だあれかゞ居やすと帰るかねの礼**

南＝「鉄漿の礼」とは、初鉄漿の時に、七所より鉄漿を貰い受ける風習があり、付け終った後、七所の家々へ礼参りすることである。

初鉄漿を付ける時期について、懐妊・分娩の後になすもの、或は相当の年輩に達すれば未婚者も染めたらしいが、通例婚礼期定まって後とされていて、本句の場合も恥かしい盛りの娘の事故、思い切って、礼に訪れたものの、平常心易いその家の人だけならばともかく、「だあれか」つまり他所の人が居るとなると尻ごみして、又次の時と帰って仕舞う。

かねの礼さしうつむいて言葉なし　三四・10

小野＝賛。「かんじんの礼を言ハずに逃ケて行キ」（三三・1）といった情景でしょう

多田＝賛。

岡田＝同。

〈季刊古川柳〉

会　員　募　集

川柳雑俳研究会は、江戸時代の川柳や雑俳及びこれに関係する文芸や風俗を研究している団体です。設立以来8年、機関紙「季刊古川柳」も30号を数えるに至っております。

この度、更に発展すべく、広く同好の士を求めることにしました。ふるって御参加下さい。

年間四〇〇〇円です。

〒419－03
静岡県富士郡芝川町西山一四一七－二
川柳雑俳研究会
代表　清博美
TEL　05446－5－0264
振替　横浜3－74559

■特集

後進にのぞむ

川柳塔だけでなく川柳界一般の後輩にのぞまれるものは？

川柳と海鼠（なまこ）

川村好郎

私は海鼠が大好きだ。このわたは殊に一杯飲む時には欠かしたくない。海鼠を十分に口に出来る季節はもう近い。それにしてもあのグロテスクな見るだけでも気持ちがわるいと一般に思われている海鼠を誰が最初に食ったのであろう。二杯酢に土しょうがをあしらうて食べることを誰が考えたのであろう。

私の父が海鼠が好きだった。母もそれに添うて好んだ。両親の美味そうに口にするのを見て、いつの間にか私も海鼠の酢のものの独特の風味に魅せられて盃を傾ける時も、ご飯の時も欲しくなるようになった。うまいとわかればその味を何とか人に教えたく思うのは当然なことで、人に勧めないのはまだ海鼠の味が本当にわからないからだ。「まあ騙されたと思って食べてごらん」と何度人々に強いてきたことか。初めは仕方なくお義理のように食っていたが、次第にその風味がわかったか、今では私の娘たちも、孫まで食うようになり勧めた親しい友人たちにも海鼠党が少くない。

私たち川柳の本当の味をどこまで知っているだろうか。余暇の趣味として楽しんでいるだけか。作句し投句することが重荷になっていないだろうか。我を生かし、生活を生かし、「川柳は人間陶冶の詩」と教えられたとこまで達しているだろうか。殊に新進気鋭の人たち、無限の川柳の道を足踏みせず、中絶せず謙虚に追求して欲しい。齢と共に老化し、カビが生えつつある私の川柳を蹴飛ばし、乗り越えて欲しい。そして川柳の持つ真の味を悟って欲しい。そこから当然としてまだ川柳をさげすみ、曲解している人の多い大衆に向い、これが現代川柳だと示し、人々に広く導き、共に川柳を十二分に味ってゆくことだ。私が人々に海鼠を勧めているように。

基本を大切に

工藤甲吉

今はすでに泉下の人で「川柳雑誌」時代、東京の高須啞三味さん（この人もすでに亡し）と共に同誌の客員だった塚越迷亭さんは

「蜜豆の豆が小豆でなく、豌豆ということになれば、それは蜜豆ではない」

と、よく言ったことを私は今もちょいちょい思い出すのである。

迷亭さんの、この持論は徹底した厳しさを

もつものであったが、これはつまり「川柳はあくまでも川柳でなければならない」ということの言い変えであって、私もこれに同調した一人であった。

ところでモノにはすべてひととおりの「約束」といったものがあり、それが、もとい、どだい、基礎を成すが川柳とて例外でないこともちろんである。したがって川柳のレールを外れて川柳はないという結論となる訳だがこれは当然と言わねばならぬだろう。

さて、私の柳友のある一人は、川柳にはいろいろなものがあっていいのだ—と言うが、これには無論、私も異存がないし、又、川柳が絶えず進歩発展しなければならないということもあたりまえのこと。

だが、しかしである。ここで注意しなければならぬ事は、いろいろなものにしろ新しいものにしろ、すべては川柳の基本を踏まえた「川柳」でなければならないという事だ。

そこで肝心なことは、川柳とは何か、ということ。いわば川柳の基本とはいったいどんなものかを先ず第一に身につけることである（これをないがしろにしてはいけない）。

そしてそれを土台に自分の進むべき道を選び、決め、その道に向かって、縦横無尽に句を作るべきではないだろうか。

だから私は、今も時々「江戸川柳辞典」や「俳諧師西鶴」その他古いものを読み返すことにしているのである。

後進にのぞむ

伊藤茶仏

先輩らしいことは何一つ出来ないでいるこの頃である。「一生に一句を残せ」をモットーに薫陶を受けた故麻生路郎門下生の一人として今昔の感に堪えない。もしも、先輩という古めかしい看板でもあるならば、焚き火にでも燃やして後進とスタートを共にしたいと念することしきりだが、老骨にはもはや、その資格すらあやしくなっている。

去る六月二十一日百万石の城下町金沢で開催された第五回全日本川柳大会に、特に今回は大会初の試みとして壇上座談会も企画され「柳界に何をのぞむか」のテーマでA・句会形式の再考、B・作家の老齢化について、C・川柳は文芸という「芸」について、D・日川協の運営についての四題を選び、時間の制約があって十分話し合うところまでは無理だったが、柳界に投じた波紋は決して小さくなかったと思う〈山田良行記〉。また今大会には西独文化庁から派遣された短詩文学研究者ハラルド・K・ヒュルツマン夫妻が出席され

ふるさとは川の流れも母も老い　ヒュルツマン

の課題「川」の入選句が披講されるとどよめきが起った。私はヒュルツマン夫婦の近くの椅子にいて、つぶさにその作句態度をうかがい感服をさせられたものである。因みに第五回全日本川柳大会に於ける文部大臣奨励賞は

日の丸のほかに知らない旗を振る　東京　臼倉寿夫

川柳大賞

整列の姿が悲し兵の墓　福井　高木一男

以上、川柳界や川柳塔の後進に今何を望まれますかのアンケートに対し不十分ではあるが後進の人達にご参考になれば幸甚である。

これからの川柳

東野大八

詩を書いていると

雪が降ってきた
えんぴつの字がこくなった

これは小学生の作った詩である。こどもの詩には原始感覚ともいうべき感動の本質がこもっている。然し、こどもの詩は厳密にいって現代詩ではない。現代感情の主体がなく、文学の社会的働きかけが皆無だからである。だがその表現の率直さは大人の詩のアイマイさより常に感動的である。（傍点参照）

伝統的（伝習性）の川柳には、鎖末的日常生活の在り様を三要素に表現したに過ぎず、詩情がない。そうかといって詩が主体の前衛川柳も同様である。現代を生きている自分の感情を、借りものの現代用語で表現しているためで、こどもの詩よりもはるかに劣る。雪が降ってきたから鉛筆の字が濃ゆくなったという童心には理屈がないから感動を呼ぶ。

NHKの「あなたのメロディ」というのがある。無名の人達の歌詞とメロディのオリジナルの場である。それを素人が選ぶのだが、常に清新なヤングメロディが選ばれている。そこには〝懐しのメロディ〟の痕跡はない。

メロディといえばジャズだが、ジャズは奏者個人のアドリブの魅惑で成立している。苛烈な情報化時代のテレビ万能の世界にそれは音楽のオリジナリティの豊穣さを裏付けている。それは現代の川柳にも不可欠のものだ。

〝詩は短きをもってよしとする〟というポオの言葉がある。現代の川柳人はこの真実を理解し含蓄して、その制約の壁に挑むべきである。伝統があるから革新といえるのであるから、古川柳の教養も大切で、この素養なくしては楽譜のよめない歌手に等しい。私が後進に望む今日よりの期待は、詩の原点を川柳で踏まえ、酷薄な自己生存の現実を如何に短詩型の制約を克服して作句するかというその熱意と努力にある。

後進にのぞむ

河村日満

私のような者が生意気にも、と思ったが、本社からの指示。決して心奢ってのペンでないことだけは理解しておいてほしい。

ところで、今、先輩として川柳界または川柳塔の後進に何を望まれますか、という設問に対し、自分の身の回りほどのことしか知らぬ私が「川柳界に」なんて生意気なことを書ける筈がないので、必然「川柳塔の後進に」となる訳だが、遠く鳥取の地から眺めているだけの「川柳塔」に対し、的外れの多いことなるであろうが、その点あらかじめご寛容の程を、と掌を合わせておきたい。

さて、今日、川柳も文芸と信じて誰も異議を唱える者もない迄になっているが、川柳の歴史には「川柳は詩か非詩か」で、大論争をされた時代があったそうな。結局大方は「川柳は詩」として認められたとか、今日「川柳は非詩」などというものなら、袋叩きにされそうな川柳界だが、それでも桑原武夫氏の「小説や近代劇を芸術と呼ぶなら、俳句は第二芸術である。」という所謂、第二芸術論が出た頃は、川柳はまだまだ第二芸術論の歯牙にもかけられなかったものである。といって、今日、文芸界から「川柳は文芸である。」というお墨付きはまだ出ていない様であるが。

しかし、川柳も何とか文芸の域にまで漕ぎ着けつつあることは事実のようだ。それは「川柳は川柳」としての定義めいたものがあるからに外ならない。最近、柳俳無差別論を唱える人がおられる様だが、私にはまだまだそこまでの理解はない。

「川柳は詩であっても、詩は川柳ではない」とは私の川柳に対する考え方であり、十七音

字リズムは川柳のいのち、と思っている。
「和」を基に現在の川柳塔調を守り続けてほしいものである。

つれづれ記三題

若本　多久志

(一) 誌面作り

「PLAN　DO　CHECK」この繰返しは私の三十余年に亘る企業経営は勿論、人間完成への信条としての指針であった。

処が過日ふと気付いて畏敬の念に打たれたのは、日本五大新聞のトップをゆくM紙が毎月末を〆切りとして、月間紙面の批判や評価を読者に求め、重要な数項目につき編集長を中心に各デスクが寄り合って協議を重ね、よりよき紙面作りに努力しているということであった。

この事は、我々の川柳塔は同人誌である関係上、更に重要なことではなかろうか。

主幹、副主幹の主観で編集が右傾したり左傾したり、常任理事で編集担当者だけの意志で偏った誌面になる事は慎しむべきである。

そうした意味で、広く参事や同人からいろいろの意見を徴する欄の設置も一方法ではなかろうか。

(二) ある記念川柳大会で

毎年秋の文化祭を中心に各地でいろいろの川柳大会が盛大に催されるのは喜びに堪えないが、過日弓削の大会で柳歴も古く地方紙の主幹もしておられる人の作品が数句抜けていた。「番傘」主幹の岸本吟一氏が確か七月号の同誌で〝こうした大会で選者級の人は出句を見合すべきではないか〟と説問の型で提唱しておられたが、私も至極同感であり既に数年前から実行している。(普通句会は別だが)

初心者がこうした大会で一句でも二句でも抜けた喜びから自信がついて、更に一層の研鑽を積み作家として育っていった例は多い。

川柳人口の増加を叫ぶ選者級の人が臆面もなく出句して、それだけ初心者の入選を少くすることは、初心者向上の芽を摘む行為として反感さえ覚えたのである。

(三) 新造語について

さすが川柳の町、弓削公民館には三百名余りの出席で、集句(一題二句宛)で五百数十句に及び選句に大汗をかいたが、与えられた課題「生きる」の中に〝生きざま〟という新造語の入った句が二十数句、勿論没にはしたが、これは〝死にざま〟に対する反語のつもりだろうが、広辞苑その他どの辞書にもそんな言葉は無い。

私は新造語のすべてを否定するものではないが、余りにもむごたらしい言葉で短詩文学の権威?を傷つけるものとして一考を煩わしたいと思うのである。

大体「生きる」という言葉は、三千年以上も昔、釈迦仏教が生れる前、ヒンズー教の人格的原理をアートマンといい、「気息」とか「呼吸」を意味する言葉で、日本語の「生きる」もこの〝息をする〟という言葉から生れてきたとも言われている尊い言葉なのである。

これが解れば「生きざま」なぞという造語は用いられる筈はないのではなかろうか。

後進に望む

浜田　久米雄

長いこと、川柳を作って来たが、この頃の川柳はどうもおかしいような気がする。あちらこちらの句会、大会に出席して見て、川柳の雑誌を読んで見て、この句は何を言うてい

るのであろうか、川柳の味が全然含まれていない、自分さえ解ったらよいというひとりよがりの句を見受けることが多い。

私はこんな句を見て一読はするが、もう再読する元気はない。こうした句が表れ出したのは何年前になるか、おそらく十年位前からこのような句を見るようになった。私はこのようなわけのわからぬ句はしばらくの時勢であろうと思い、先輩の方も気にしなくてもよい、もうしばらくすればこんな句は無くなるであろうからと言ってくれた。ところがなかなか減らないのである。

こう言った句を作る人は現在の川柳に物足らぬものを感じて古い伝統を脱脚して新しい川柳の道を開拓しようとしているに違いないと思う。けれどもそれは川柳ではない。川柳以外のものである。昔から川柳は三要素、「穿ち」「軽妙」「面白味」のうちのどれかを備えていなければならない。ところが近頃発表されている句は三要素どころか無味乾燥の句ばかりである。これらの句を作る人は川柳の句会に出席し、川柳雑誌に自分の句を発表しているのである。また選者も選者である。句会において、雑誌において川柳でない句を川柳として取り上げているのであるから困ったものだと思う。

これらの句を川柳を作っていない人が見て解るはずはなく、川柳を作っている人も再読、三読して解らないのであるから。こうした人はこうした人ばかり寄って句会を作り、雑誌を作るべきではなかろうか。もち論「川柳」という字は使ってもらいたくない。そうしてその訳のわからぬ句を作っている人がわけのわからぬ会を作り、雑誌を発行すればわれわれは安泰である。

私の念い

尼　緑之助

ある若い人（柳歴二、三年）から『川柳塔は老人臭くて魅力がない。若人が翔べるような清新さが欲しい』こんな意味の手紙を受け取った。革新的抽象川柳の要望である。

便宜上、本格派（保守）を右とし、革新派を左として大要次のような返事を書いた。

残念ながら若年層が少なく、老人層（若人から見たら中年層も含まれるだろう）が断然多いから、老人臭いと感じられても仕方がない。元来左から見れば、理屈抜きに右は気にいらぬ。勿論右側にも左右はあり、現況が充分だとは思っていない。それなりに常に前進を心掛けている筈だ。

同じ内容でも若い人が詠えば感動性が強く期待性も伴う。ハラハラしながらも、こんな若さを切望しているのも事実である。

若人が立ち上がれば、若人がこれに呼応する。老人が呼びかければ、同年輩に輪が拡がるのは理の当然。現況では若年層が少なすぎるので、輪の拡がりが足踏みをしているのは残念だ。

又、別の若い人、これは誰に誘われたというのでもなく、川柳に惹かれて（右の作品）私の門を叩かれた。二回だけ句会に出席、火が点いたところだ。この人も若い同友が少ないのに不満のようで、二年、三年経てば、前者と同じに壁に当面するのではないかとも思ったりする。

兎も角も充分川柳を極わめながら進んで欲しい。川柳の世界にも流行がある。流行には流行の理論はある。無視も賞めぬが、無批判追従にも問題がある。一歩一歩を力強く踏みしめながら、積み上げていただきたい。

私にも若い頃はあった。劇しく翔んで、ポッカリ中止と言ったケースも見て来た。お互に明日の川柳へ挑戦しようではないか。

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

野村　太茂津

ひと摑みの髪の母とはなり給う

鈴木　村諷子

母を思慕するのは年齢に関係なく皆同じである。いつまでも若く元気で居てほしいと希う、ちんまりと座っている老いた母の姿を見るとき、作者はじっとしては居れぬ。今こそ母につくさねばと心に言い聞かす。

合歓の花母の乳房を焼いて来ぬ

橘高　薫風

合歓の花は淡い紅色で、ぼーッと霞み、夢幻の世界に誘ってくれる。咲く六～七月の時季を逃がさず毎年ひとりで、或は柳友を誘ってわざわざ見にゆく。作者は最近ご尊母を亡くされたので殊に合歓の花に母のイメージを重ねて悔んでいるのであろう。

墓洗う残りすくない気で洗う

河村　日満

孟蘭盆会、御先祖さまの墓を洗い、草をむしりながら、自分も又この墓の下に眠るのもそんなに遠くはないのだ、残り少い現世を大切に生きようと心に誓う、悟りの境地か。

惜しいかな喋り過ぎてる晴姿

若宮　武雄

静かに微笑んで、胸を張り背筋を伸ばして起って居れば輝く晴姿なのに、話し出して雰囲気に酔うて喋り過ぎた。作者の目は同情をもってその惜しい隙を捉えた。

亡母の櫛愛しつづけた父が好き

岩本　雀踊子

このような父なら私も好きである。母が生前、肌身放さず愛用したであろうか、今もまだ鏡台の小抽斗にある黄楊の櫛である。

見舞客の前では痛んだことがない

傍島　静馬

病人を優しく励まそうと見舞いにゆく、さぞ苦しんで気落ちしているであろうと期待？をかけてくる。そんなときに限ってちっとも痛まない。見舞われる本尊はこんなとき痛んでほしい？のである。ご期待に応えて痛そうな顔をして見せようか。心理を穿っている。

平凡な石で蹴られた方へ向く

小林　由多香

こんな人は、ほんとに怖い。足蹴にされても従っている風に見せているだけで、心は逆に怒りに震えているのだ。

手も足も無欲にさせる青畳

那須　鎮彦

作者は若い。新築した我が城、家族も入った、家具も入れてそれぞれの位置を占めた、蘭草の匂う新しい畳に、その儘の姿で大の字に仰臥した、素直な感懐の一刻である。

路郎師の「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」にはまだ遠い若さである。

緑山へ死ねぬ死ねぬと見惚れ居り

坂口　公子

山の緑が目に染むようだ。この感動を満喫出来る幸せな今、修羅の巷を生き抜いて来た体を大切にせねばとつくづく思う。

妻だから言いたいだけを聞いてやる

児島　与呂志

功成り名遂げた作者の、ほのぼのとした愛情を病妻にそそぐ、妻も又、夫の心がわかり過ぎるほどわかるから尚のこと言いつのる。この夫婦に幸あれ。

大切な話へ目の玉動きすぎ

天正千楢

聞いている方にも関係のある大切な話なのに、只うんうんと頷くだけで、心から聞いてくれているとは思えない。話も白けてくる。

悲しみや背は悠々と歩くとも

野呂　鵜汀

胸張って悠々と歩いていても、背や肩のあたりは悲しさを隠せない後姿である。

騙すのは女騙されるのも女

若柳　潮花

裏切りとはいまだに思いたくもなし

岩田　美代

騙すなら騙しつづけてほしいという女心。静かに次の句を反芻しよう。

拭き消せぬ邪心へ滝の音しきり

林　瑞枝

丸漫抄

正本水客選

十人の違った顔のむつかしさ　鳥取市　武田帆雀
別人のような和服で行く茶会
噂撒く女に話題などやらぬ
要領の悪い男が推挙され
赤を着るいつから平気になった妻　今治市　矢野佳雲

すぐもとの青さに戻る波がしら
謎を解く鍵が怖くて差し込めぬ
場違いの部屋へ這入って振り向かれ
どやされて枕寝易い型になり
空振りに馴れてセールス板につき　岡山市　原田凡太郎

どこまでも歩いてみたい秋日和
頼まれもせぬのに肚を見せたがり
観光へ暴れてみせる樽神輿
聞き流すことも覚えてくれた嫁

風車　風のない日は風を待ち　尼崎市　北浦牧郎
てのひらに卵のぬくみ　里の盆
老い先のその先もみて盆の墓
ステテコの補欠外野を守らされ
昼寝から覚めてもひとり蚊のゆくえ
一日一善　妻にビールを酌いでやる　大阪市　津山刀水

階段を逢いに行く娘の胸の鈴
哀しいなドラマの裏に居た男
たくらみのレモンは薄く浮いていた
点数を稼ぐ尻尾がちぎれそう
嫁無口　釦はちゃんとつけてあり　尼崎市　奥山美智子

うろこ雲ほうきで掃いてみたくなる
燃えさかる思いひとりで持ち切れぬ
神様の心は誰も覗けない

黒髪が自慢であった母おもう
独り言落葉が聞いてくれている

高槻市　竹内花代子

寄附で組むやぐら団地の盆踊り
父の日と母の日を一緒に娘が尋ね
笑うてるようなお腹を出して夏
一日の役目はたして陽が沈み
ほんとうか嘘か素顔をほめてくれ

尼崎市　丹下玉子

鹿帰る春日野すでに黄昏て
ベランダで一つ実った茄子の鉢
嘘のない息子夫婦と飲むコーヒー
八方美人　虫のよい事喋ってる
コンパスの中で嘘も少しある家族

八尾市　高杉千歩

したたかに生きた昔に知性など
凡凡のいま追求の刻惜しむ
時折は水掛論をお茶にする
ひとりよし子となら更に旅の鈴
彼岸花いちめんお地蔵様こんにちわ

松原市　佐藤藤子

弱虫で用心深く生きている
昔はねと話す事のみ多くなり
なんとなくダイヤル回してみたくなる
失敗を気にしているな　よく喋る
笑顔よいあの娘に運がついている

鳥取県　和井観洋

握り拳の中に挑戦状がある
足跡を辿れば昨日の風と会う
夏の夜の網戸の向うで蚊が飢える
爪を切る女に秋が深くなる
手の中の金魚跳ねてる生きている

兵庫県　中田白李

肩書が増えると若さが一つ減る
兵法にない手で一家守りぬく
のびのびになっても御恩は返す気で
雑談の合い間にきっちり飲む薬
真白いシーツ本気になりたがる

大阪市　村上田鶴子

彩褪せた日傘が悔いを一つ持つ
逝ってから姉の美しさだんだんに
亡母の影　ここにもあったかくし味
仏縁に寄りたる夜は素直なり
自愛増す花火の後の闇にいて

弘前市　田中叶

水たまり待ちくたびれた顔が浮き
近道に蚯蚓死んでる雨あがり
ふと気づく小雨に赤きポストかな
昼顔の咲く道巡査とすれ違う
ふるさとの餅　新聞の活字つき

友泊める机を寄せて床を敷く
売る方も高いと思うマスカット
宝物拝観　外人さんは靴を脱ぎ
夏ものを一掃みんな五割引き

名古屋市　鈴木可香

旅便り貴方の歩く音がする
土用干し姑の着物を予約する
喜びに一人で浸る淋しさよ
美しい秘密は女を強くする

大阪市　橋元美恵

嘘の一つ位　毎日帰る靴
焼香の順に他人となる花輪
めぐり逢い開けてはならぬ玉手箱
栗一つころげ出稼ぎ見送られ

岐阜市　市川鱗魚

ゆで卵剝きむきやさしい嘘をつく
仲のよいセキセイながめてる昼下り
胎教のおかげか一方のリズム感
ブランコの母と子同じ風に逢い

竹原市　古田比呂子

両の手で隠しきれない哀しみで
一言が台風の目になる娘
鍵盤に十指のはずむ文化の日
夏の花火　女は後を振り向かぬ

寝屋川市　稲葉好子

美しい波紋残して逝ったひと
かけがえのない人生を塗り替える
人妻の膝が動いた隙間風
どうにでもなれと鳳仙花が弾け

熊本市　有働芳仙

泥んこを強調しているコマーシャル
道みちの話　子のこと孫のこと
孫の守り転べば抱ける距離にいる
余燼にも似た情熱を温めあい

唐津市　浜本久仁於

ほめた事はないが女房の有難み
セーラー服でも口答え
日記書かなんだ日の苦しみだけ残る
盃まで呑みすぎと云いたそう

新潟県　高野不二

死に急ぎする要もなしくすり漬け
外泊でテスト退院近くなり
どちらかが寝込まぬうちに老いの旅
女とは喪服が似合う生れつき

尼崎市　中谷利美

ハンドルを握るお喋り恐く聞く
どた靴で躓きもなく職を終え
雨静か嫁いだ娘へ便り書く
売れてない店へ西日が強すぎる

尼崎市　西村かすみ

パパママの見守る中の三輪車　大洲市　米沢暁明

相談所妙な理屈も聞いてから
それぞれの思惑があるサングラス
双方が水掛論と知りながら　八尾市　堀内柳杣

改めて愛国心を思案する
老人と鳩が無言の昼下り
日本語がだんだん減ってゆく新聞
少年が老後の話語りあい　大阪市　西村芙佐女

中学生　少女の顔で居てほしい
公園はかわいた街の吐息聞く
ひとり言だと思うて聞く小言
パンツまで借りて来た子の義理がある　米子市　足立由美子

心足る日には水面の影も満つ
頑張りの精神児から学ばされ
心まで洗われそうな白を干し
老いたのか妙に娘を恋しがり　唐津市　田口虹汀

何もかも素直に妥協する案山子
底に来て人の涙の味を知り
飲んで子を叱る間は大丈夫
何時の間に出たか尾花が揺れている

愚をさとり流れに任すことにする
産みたくてチャボ産みたくてうずくまり
夫にも覚えぬ嫉妬孫に抱き
大和路に栄華の跡のここかしこ　境港市　細木歳栄

ページ繰る音に寝がえる夫の咳
誕生日祝いそびれて菜種梅雨
書き出しのあらたまりたる子の手紙
トンネルを抜けると合歓の花に会い　島根県　松本はるみ

苦の果ての顔で石仏笑み給う
捨てられる運命と仔犬知っていた
蟬しぐれ己が終焉奏でる譜
よたよたと流灯ひとつおくれがち　島根県　藤原鈴江

鴨川の夜　太陽の灯がともる
昼過ぎの電車とんぼも乗ってくる
脇役に徹した人が長となる
胃袋を意識したのは切ってから　和泉市　岡井やすお

誰にでも会釈をしたいうれしい日
正直が取柄　貧乏からぬけず
手さぐりでやっとわかった線を引く
真剣に問うてジョークでいなされる　和歌山市　細川稚代

今治市　八塚三五島

関ヶ原桃配山ならみんな見え
ポートピア横目に神戸通過する
遠回りだが前に来た道を行き
じゅうやくを軒に残して過疎とする

西宮市　朝山千世子

秋風や灯ともし頃の母恋し
虫の音が出逢いの胸を弾ませる
漫才で笑い飛ばせぬ時期が来た
パン噛りさし飢え知らぬ子が漫画読む

鳥取県　加藤茶人

半農の耳で米価を聞くニュース
間接にかかる火の粉は金で折れ
反戦の叫びは八月だけの記事
善人の証拠あせっている吃り

大和高田市　岸本豊平次

知らぬ振りしてる笑顔が知っている
男にも泣く時をくれ明日のため
汗だけを拭いたハンカチはまるめ込み
懐手で待ってる明日に悔られ

羽曳野市　麻野幽玄

札読んだ指でリンゴをもてなされ
今日からの命余得に退院し
サギ草の咲き競い居り陽へ向い
飲ます気も飲む気もないが買うワイン

島根県　松本文子

負け犬よ今は力を貯めておけ
許し合う心は窓をあけたまま
ひとことを自分の為にとっておく
秋風に風鈴いやいや鳴っている

大阪市　杉本智慧子

明月よ鈴虫あわれ雌ばかり
七人に一人が行ったポートピア
秋の厨で小豆ことこと煮えている
秋深し亡母に捧げる鎮魂歌

長崎県　岩崎和子

苦労した白髪はそれなり美しい
最初から裸を見せるお人好し
議論だけ前進あとは無責任
どの足も前に進めと言うブーツ

青森市　工藤蕗子

三回忌亡母を泣かせた子等が寄り
洗濯をたたんで今日をしめくくる
気心の合う昼飯に鯛茶漬

八尾市　山下みつる

本人は行く気が無くて戦争論
純情な恋しか知らぬ五十過ぎ
定年か　いろいろ銀行出入する

高槻市　田崎あき子

二人三脚走る相手のある限り

ビー玉の七色へ夢重ねたり
顔触れの変らぬままで秋講座
和歌山県　天満　三千代

お祝いの言葉が不意でうろたえる
叩かれて木魚の音が経にとけ
両足は駆引きもなく駈けてくる
今治市　新居田　胡頽子

幸せな顔へ祭りの花火映え
ダルマにも祝う拍手の掌が欲しい
手をつなぐ広場ではしゃぐ身障児
大阪市　堀口　欣一

新聞も親子二代という朝日
東京はまだ伸びてゆく空があり
新聞に眼鏡取る人かける人
竹原市　古田　鈍舟

清貧に甘んじけんかの種もない
場違いのとこへ来ましたとも云えず
淡彩で描いて野菊の彩深し
旭川市　朝倉　大柏

二三日健康食で測ってみ
どっちでもいいと言われてまた迷い
母さんのいない食卓輪にならず
西条市　片上　明水

結婚をすると女の謎が消え
鈴虫が鳴く熱燗がほしい夜

伴奏がないから主張　私語になる
大阪市　鍛原　千里

音消した女の鈴はチャンス待つ
故里は何時もやさしい貌でいる
糠みそを出して茶漬けの妻のるす
松江市　豊田　巡歩

刈干し唄　鎌の背で割る栗のいが
懐が寒いと歩巾せまくなる
嵐にもきっと散らない花もある
兵庫県　藤原　捷一

夕支度　干がれい叩く音もする
こおろぎが夜遊びに来てよく喋る
男やもめ仏祭りも板につき
大阪市　稲本　凡子

帰りたい一心荷物を解かささず（孫入院）
嘘云うて帰ったものの落着かず
食って寝るその単純に掌を合せ
唐津市　浜本　義美

泥臭いとこが気に入る盆踊り
内幕を知らない男の大あぐら
飢えている国があっても青田刈る
東予市　小山　悠泉

あの時の過信を悔いる勇み足
基地の街　核が匂うて来る広場
故郷はよし故郷の風そよぐ

夜店のヒヨコ大きく育ち時を告げ　八尾市　宮崎シマ子

あれ程に臍曲げてれば寂しかろ
来た嫁が美人でなくて平和なり　尼崎市　矢萩貞子

真夜中に窓辺へ寄って句を作る
盆休み新幹線もおつき合い
大文字京の夜に消え盆がすぎ　岡山県　池田半仙

孫とするキャッチボールの球温し
言葉うら見透かす様な目と出会い
錦鯉お前の登る滝はない　東広島市　石井さわ子

旅先のふれ合い故郷語り合い
なすトマト植えてあしたの色を待つ
平凡な日記を閉じるだけの日よ　倉吉市　今村夕路

投げ捨ての吸殻　憎悪の眼で眺め
底抜けのあかるさ末子にある長所
洗濯機　百円硬貨派手な音　大阪市　日阪秋子

苦労した白髪いたわり染めずいる
忙しい時に雑用思い出し
イメージチェンジして夫の気引いてみる　名古屋市　越村枯梢

それなりに似合って二人ずつベンチ
置き薬空っぽにして病んでいる
アカシアの豆がはじける秋の風　大阪市　白石潔

雨脚がぐんぐん迫る峠みち
産地直送団地広場が活気づき
平均余命で貯金残高割ってみる　米子市　寺沢みど里

釣好きを深夜の海がはなさない
がんばりっ子応援席へするサイン
丸髷の亡母なつかしい盆供養　島根県　東原福子

押し寄せる波のうねりのように酔う
秋の蚊の精一杯に刺してにげ
爆音に間を合わせてる山の鳥　岸和田市　吉水照江

平凡な余生が欲しい御仏前
子育ては母にまかして父孤独
姑は自分の城を主張する　大阪市　吐田公一

秒読みとなっても不惑まだ知らず
また一つ罪を重ねた今日を生き
ほどほどに妬かれて美味い妻の酌　兵庫県　野々口ゆう也

正論も老いの愚痴だと捨てられる

何もかも忘れる老いだが箸はもつ
自問自答　正論なれど我を捨てる
熊本市　高野宵草

カタカナが多くて困る老眼鏡
争いの外へ逃れて好奇の目
慰謝料をいうとき女研ぎすます
豊中市　満仲きく子

見つけたりテトラポットに白い秋
お辞儀して　あげた頭でまたお辞儀
陽が落ちたああちち恋しはは恋し
松原市　本多洋子

少年の口笛通る秋の朝
頭では判って心で判りかね
言訳はうなずきながら聞いていず
羽曳野市　佐野白水

桂離宮カメラ黙認した案内
湯葉刺身けんはやっぱり大根なり
下駄箱で履かない男の下駄が邪魔
山口県　高崎喜一

村長は途中の野良着とよく話す
文化財指定　手入れもままならず
伝言板もう待ちません時刻来る
西宮市　妹尾春江

炎天を虫とりの子らの後をゆく
おおきにと云って東京っ子の孫は去ぬ
風鈴の音色も秋に白桔梗
大阪市　清水康恵

若返りさがす女のバーゲンセール
ほどほどの酒量で夫婦仲が良い
母からの便りに潮風乗って来る
兵庫県　奥野テル

無人駅誰の善意かカンナ咲く
老残へ歩幅揃えてヤジロベー
予報より傘を頼りに秋の旅
大阪市　岡田ふみ

父の知恵らしく見せてる母の知恵
鳴き初めた虫の音　日記に記しとく
家中を揺らして田舎の姑帰る
米子市　野坂なみ

別わくで　まだ頑張れる教育費
世界地図　赤やぼかしの色が染み
水切りで一日の茶花をいとおしむ
岡山県　松本元江

理想論　語る講師の軽い口
幸せと云える日々なり今日も無事
三人の女が愚痴を持って寄り
兵庫県　森脇和子

欲捨てた母の老い先案じられ
セミを追う子等の残した笑い声
老い二人切り換えきかぬ愚痴をもち

病院はまず検温で朝が明け
生きている証明一発のガスの音
消灯へ今日の命よ明日まで

青森県　波　ただお

垣おいて話す気ぼねの折れる事
娘や孫の去ってさびしい夏の雲
風邪の児が素直になれば又案じ

兵庫県　日増貞子

停止線無いから走れるだけ走る
坂ばかり歩いてぐちを云わぬ父
被爆手帖抱いて哀しき旅果つる

岡山県　吉末謹太郎

荷が一つ消えて足どり軽くなる
新しいくつ下はねてみたくなり
花活けてガラスのコップ生きてくる

三重県　平野薫子

貴方にも実家があるとは名セリフ
バイバスが積木の街をまたつくり
お百度のように今月皆勤す

唐津市　仁部四郎

弓なりに野草は風に逆らわぬ
天を突くように狂人よく笑う
すげ笠のかかしアベックで立たされる

米子市　田中亜弥

水仙へ尽きぬ亡妻への思慕つのる
色メガネかけて他人という気取り
嫁き時と思う親娘の家具売場

泉佐野市　真崎浪速子

足が伸び背丈ものびた米離れ
紫陽花の一株すねた彩で咲き
左遷地の風が私の肌に合い

寝屋川市　立床晴風

終戦の日から数える父の癖
盆休みくたびれ果てた新幹線
人間の弱さがもろに出る別れ

大阪市　野田君枝

墓碑だけの領地遺した奥の院
慈悲の手に火蛾窓外に投げてやり
切っ先が喉元に来る北の国

大阪市　大野武太

飯粒の白さを拾い孫笑う
休日の団地ばらばら朝が来る
手を合わせいただきますという癖で
るすばんは夕餉の支度の米をとぐ
バイタリティだけでは女承知せず
群集の一人一人の孤独感

高知県　山下登舟

鳴門市　八木芳水

島根県　岩佐富子

唐津市　久保正敏

交野市　山本テルミ

旅がえり家の料理が舌にあい
草刈りで疲れがどっと出た昼寝

神戸市　久保禎三

老師ならかくしゃく月光仮面好き
湯のたぎる音へ遠くに秋の雨

堺市　田辺哲寿

鏡見る女　自分の夢を見る
肩書の名刺集めて策を練る

浜田市　佐々木裕

一坪の墓に一族屯する
老けこんで近い他人を当てにする

愛知県　国分甲子郎

戦争を知らぬ命が死に急ぐ
防災の訓練へ親と子と妻といる

唐津市　桑原掬治

原爆は虫も沢山殺したろう
ひと喧嘩すめば兄弟で漫画読み

鳥取県　石井雅水

ミス名産　作る苦労のない笑い
かあさんと呼べばいびきが返ってき

大阪市　山本炉斉

精霊を送って行事もひと休み
サラ金に勤め一つの仮面もつ

西宮市　林はつ絵

また誰の葬儀か寺は準備中
貧しさが仮面にまでも滲み出る

島根県　堀江百代

早起きに初秋の風が頬撫でる
明日があるまだ人生に先がある

鳥取県　武田照子

思い出の父の姿は海に住み
催促の人が来そうな雨模様

尾道市　八木秀水

花の生命　菊人形という孤独
床柱　年功序列の重い日よ

大阪市　平井露芳

同権で女も神輿かつがされ
熟年の最後はやはり枯れて来る

東大阪市　高木コハギ

渋滞に歩きたくなるバスの中
山の寺着くまで友とぐち話

八戸市　島田昭治

台風にやられたリンゴに話しかけ
手に余るヤングへ逆に褒めてみる

鳥取県　羽津川公乃

ハガキでは失礼　手紙は間がもてず
職安の帰りバーゲン見て歩き

奈良県　宮川古都路

立話し敬語が続き団地ひる

里の土次男三男が減らしゆく　橿原市　西本保夫

嘱託の笑顔はこんな時に出る
嘱託の自慢　無遅刻無欠勤　吹田市　西川景子

ゴキブリと戦いすんで夏は暮れ
マイク持つ父は意外に若い声　岡山市　串田句味地

バインダーの始動を尻目に雁の列
したたりのかすかな音が池を溜め　泉佐野市　大工静子

母と子と同じ三つ編みおさげ髪
預けた魚貫って来るよと竿かつぐ　八尾市　松下蕉露

コマーシャル覚えて商品名知らず
会う度に肩書かわる友が居り　河内長野市　糸谷春草

火山灰で使えぬプール掃除せず
相乗りの単車ひやひやさせ走る　浜田市　中川幸一

毒舌を妻と嫁とに吐く平和
バーゲンに掴んでは放し掴んでは放し　唐津市　木塚素石

スピーチのきまり文句に私語が増し
失敗へ親なればなお腹が立ち　唐津市　山下勝一

奉賀帳下になる程字も細り
思い出を波が消しゆく夏終る　尾鷲市　渡辺伊津志

美しい顔引き立てる白真珠
混濁の中で生きてる名古屋弁　奈良県　大寛直木

縁結ぶ神が見ている俄雨
つっ走る少年の瞳に地獄絵図　東大阪市　坂本喜洸

胎教で子の運命を決めてやる　尼崎市　中辻千子

コオロギの初音にホッと耳すます　大阪市　山田松太朗

騙し合いの夫婦相和し五十年　大阪市　村島秀村

菊花展大阪城にも秋が来る　兵庫県　山根左春

整形のほうたい取ればどんな顔　青森県　岩淵一星

塩加減　老母の味に逆えず　東大阪市　三宅哲夫

どこにでもみんな似たよな花が咲く

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

恒松町紅

夫婦の絵濃淡の彩出し合うて　野々口ゆう也

絵の生命は濃淡にある。この句は、夫婦がお互いの長所短所を融和し、助け合って仲睦まじく生きてゆく姿を絵として表現している。濃淡の彩とあるから、それぞれの持ち味を出し合うとでも解釈すべきか、いずれにしても巧妙な作品である。

停年でただの人間に戻される　田辺　哲寿

停年の句は沢山あるが、この句はただの人間という中五が面白い。役職の人でも、そうでない人も、職場という社会に置かれていた人間が停年を迎え職場を離れると、ただの人間になってしまう。さて、そこから又新しい社会人としての生活が始まるのである。そこで何か趣味にでも没頭出来る人は良いが、何んにもする事が無い人は、又新しい社会を心のよりどころとして、求めてゆかねばならないのである。

山菜と川魚に左遷いたわられ　岩淵　一星

人事異動で、思いもかけぬ山間僻地へ転勤を命ぜられ赴任したものの、都会とはうってかわって不便さと淋しさ、単身赴任なら尚更のこと。しかし、宿の食膳を賑わした山菜と川魚の美味しさは格別、とても都会では味わえない。そして地酒の酔心地、左遷のうらみもいつしか忘れて山菜料理に舌鼓をうつ。

いそがしい一日だった手の輪ゴム　北浦　牧郎

今日は非常に忙しかった。やっと落着いたところで、フト目についた手首の輪ゴム。外してみると手首にゴムの跡が出来ているのだが、忙しかったのでとんと気がつかなかった。一日を忙しく立ち働いた主婦の姿であろう。手の輪ゴムが面白い。

不発弾溜めて娘の里帰り　山崎　広風

嫁ぎ先から久しぶりに娘が里帰りした。姑や小姑との気苦労や何かであろう。愚痴りたい事を一ぱい溜めて。実家の母に訴えるつもりだったが、やさしい母の顔を見たら何もいえない。そんな娘の気持ちを受けとめる親心の句である。

近道を知らぬ男で靴が減り　浜本　義美

人生にはいろいろな近道があるだろう。或いは金で買う近道もあろう。その男は、真面目で、正直なのか、その近道を知らないままに、長い道のりを靴を減らしながら歩いてゆく。もっとも知っていてもその近道を通らない人もある。

玄関を入れば女房の声になり　高崎　喜一

奥から「お帰りなさい」という女房の声が玄関一ぱいにひろがる。我が家へ帰ったという安堵感が女房の声に表わされている。

あれ買うてこれ買うてが寝てしまい　新谷　春吉

夏祭りであろうか。夜店の前でひとしきり駄々をこねていた孫も、いつしか背中で寝てしまったのだろう。ほほえましい光景が浮かんでくる。

束ね髪梳けば悪女になりそうな　橋元　美恵

束ね髪はおとなしい髪型、或いは洗髪のあとの束ね髪か。女が鏡に向って髪を梳くとき心の隙間へそっと悪魔がしのびよる。

うれしい日雑巾絞る音も派手　稲本　凡子

矢印の通りに歩くお人好し　岩崎　和子

土壇場になって人間仮面とる　島田　昭治

手仕事へ言葉もしまい込んだまま　日阪　秋子

男には説明のいる落し蓋　米沢　暁明

母さんを寄ってたかって派手にする　浜本久仁於

大阪市　清水健司
車から顔つき出して道をきく

大阪市　吐田公一
ステテコの家からクリスタルが出る

岡山県　池田半仙
蟬屍空蟬よりもいと哀れ

寝屋川市　江口度
ふれられる好意待ってる鳳仙花

大阪市　藤森小雅子
アブストラクト玄の個展をみるも秋

岡山県　直原七面山
僕は胃で妻は肥満で医者通い

堺市　田辺哲寿
旅先で働き者の落着かず

堺市　大道美乙女
肩書の重さに耐えている孤独

大阪市　川口弘生
通夜経の僧も現身道迷う

青森県　岩淵一星
仮縫いを鏡にも見せ妻に見せ

浜田市　佐々木裕
商品化されてデビューの戦時食

岡山市　清水金太郎
遺族の顔ぶれ見て香奠の額を決め

東大阪市　三宅哲夫
聖域も道義混沌修羅場化

兵庫県　野々口ゆう也
太陽も星も年寄り置いてゆく

和泉市　西岡洛酔
秋の風酷暑を生きた身にいとし

八尾市　松下蕉露

唐津市　桑原掬治
身の上を語る筋書出来ている

平田市　久家代仕男
羊羹のように生垣刈り込まれ

岡山県　荻原鮫虎狼
亡妻と逢う夕焼け雲の綿帽子

岸和田市　古野ひで
遮断機を潜った犬は通り過ぎ

松江市　豊田巡歩
家中が祭アホウで気が揃い

米子市　青戸田鶴
化粧せぬ妻は我が家の功労者

米子市　菅井とも子
別れさえライト非情に輝やかせ

羽咋市　三宅ろ亭
シーズンを問わずゴキブリ西東

岡山県　松本元江
ナツメロに老人会は活気づき

尼崎市　奥山美智子
美味しかったとひと言欲しい台所

岸和田市　原さよ子
よく遊び夢に駆けてる子の寝顔

鳥取市　武田帆雀
子の便りへ丹念にメガネ拭く

米子市　桑原伊都
魚屋で再起をすると言う夫婦

東子市　小山悠泉
前方で雑兵だけが踊らされ

守口市　村田瓢太
下り坂もう弾まない父の毬

殺人犯は打首獄門それでよし

京都市　山本桐下
家元の定めに挑むときもある

兵庫県　森脇和子
日向ぼこ姑の民話へ聞き上手

熊野市　坪田冬花
お見合いの大事な時に腹の虫

高知県　山下登舟
山山にこだまの走る遠花火

大阪市　中野忠広
大声を出すなと小声で叱ってる

鳥取県　石井雅水
夢だけは子等に負けない自負の酒

唐津市　木塚素石
ざれ言を肴に飲む友一人減り

米子市　石垣花子
評判の芸人育てた裏長屋

鳴門市　八木芳水
ライバルのお世辞も齢が軽く受け

米子市　寺沢みど里
いたずらっ子寝息をたてて罪を消す

山口県　高崎喜一
ほどほどに仕事していて出世せず

大阪市　松尾茂子
点滴へ瞳こらして昼下り

寝屋川市　宮尾あいき
雲がくれの月を呼んでる虫の声

高知県　赤川菊野
山鳩がかなしい声で亡母を恋う

★

投句先　〒560 豊中市中桜塚三丁目13―15
橘高薫風（ハガキに3句）

病室の白と闘う第一夜　寝屋川市　柴田英壬子

秋の虹へおむかいの二戸落成す　和歌山市　松原寿子

どこまでのいのち揺らすか尾花たち　岡山市　井上柳五郎

売血で生きのびし日のことふれず　富田林市　岩田美代

私なりの台風の番号考える　高槻市　田崎あき子

アニメーション騎士は仮面で登場す　兵庫県　速水房子

実る秋梨たわわなる家族連れ　松原市　佐藤藤子

いにしえの吐息伝わる乱れ箱　京都市　都倉求芽

石橋を探してる間に氾濫し　京都市　山本規不風

余生何年でもいいよ新築に　西宮市　朝山千世子

こぼれ種秋あさがおをわが身とも　岡山市　原田いとよ

待ちながらあなた好きよと言ってみる　東大阪市　竹中綾珠

紅芙蓉秋深まって色うすれ　和歌山市　浦野和子

一コマの影絵の底の夏帽子　枚方市　二宮山久

相談にのれない席をそっと立ち　米子市　政岡日枝子

輝やかずくもらず男をひきたてる　島根県　小砂白汀

新月の何を狙うかブーメラン　島根県　堀江芳子

声だして笑って何もかもほぐれ　島根県　堀江正朗

虫鳴いて想い出す顔みなはたち　唐津市　久保正敏

責任の所在をぼかす判の数　町田市　竹内紫錆

全選手新聞に載せ負けチーム　寝屋川市　稲葉好子

かくれんぼ鬼さんつみき積んでいる　大阪市　小野風童

この道で出逢った頃の木をさがす　大阪市　村上喜代美

うろこ雲写してプールの安堵顔　豊中市　満仲きく子

翔んでいる女で会話ソツがない　松山市　谷真風

出漁の乾杯をする缶ビール　大阪市　津山刀水

あした散る花一日を悩んでる　大阪市　児島与呂志

悲しくも童女の心抱いて逝く（井上てる女逝く）　今治市　八塚三五島

廃校になるとは知らず記念の樹　岡山市　原田凡太郎

老いてなおくぐってみたい炎の輪　大阪市　中西兼治郎

のみながらラムネの玉を考える　尾鷲市　渡辺伊津志

滝壺の渦混濁を吸収す　米子市　雑賀美世

きゃら木のひと芽が枯れて夏終る　鳥取市　両川洋々

悔い抱いた男が石にけつまずく　島根県　木村はじめ

本当の友近よらず遠のかず　島根県　西村早苗

阿呆ではないが疲れた口をあけ　神戸市　久保禎三

親切も寡黙な男のそれが好き　尼崎市　黒川紫香

都会には一円捨てる池がある　島根県　榊原秀子

ボールペン手になじむのと馴染まぬと　富田林市　中村優

桐一葉落ちて殊更口重し　倉敷市　藤井春日

子の前で夫婦喧嘩は止しましょう　松原市　本多洋子

窯元の土器のかけらや秋を行く　倉吉市　奥谷弘朗

反省の糸口ふさぐ孤独感　河内長野市　井上喜酔

ああ平和日本髭かびが生え　吹田市　西川景子

手をとられ片足かけた丸木橋　米子市　小西雄々

麻痺の手へいたずら知らずバラを抱く　羽曳野市　麻野幽玄

薬飲むため正確にする食事

愛染帖

橘高薫風選

蓮池の花ひらく音霊の音　青森市　工藤甲吉
ミッドウェー馬耳東風で出入する
秋霖や今日は山頭火を想い　今治市　月原宵明
輪を乱しそれから烏合の衆となる
香水の匂いに知性欠けている　大阪市　朝倉利義
丸紅の社史にはのらぬロッキード
なにもする事がないので医者に行く　倉敷市　水粉千翁
仏壇の扉を開けて妻の朝
もの足らぬ顔にはなってなるものか　浜田市　中川幸一
救急車乗れば危篤の貌になる
男気がちとあるときは酔うている　今治市　越智一水
闘わぬ組合減員ばかりされ
臨調へ死の商人の顔ならべ　大阪市　神夏磯道子
直角に曲ると用心深くなる
歳月は恐ろしきかな罪薄る　宝塚市　吉田笑女
孫ふたり手をふる初秋の夢の中
どの顔で孫見送ろか老いふたり　西宮市　妹尾春江
実る田に廃線反対の案山子たつ
亡き友の母が商う花の店　笠岡市　木山遠二
行儀よい猫と老夫婦と月見
美しく掃き美しくまた落葉　大阪市　白石潔
故郷へ墓参落武者意識あり
心の錆おとそう余生墨を磨る　鳥取県　鈴木村諷子
手に掬うように母ごを連れて出る
恩讐の街の夜空のほの明り　笠岡市　高木桃里
脇役に甘んじ長寿全うし
押売りに負け老妻も脆うなり　東大阪市　市場没食子
当世なら水子になっていたろ僕
雑草もあちゃらのものに場をとられ　奈良市　森田カズエ
出つくしたチューブのような老母の顔
花束が一つロビーの隅の椅子　青森県　五十嵐操史
お互いが誤解しあって結ばれる
幸せは笑う力を貯めている　今治市　矢野佳雲
アメリカで皿洗い機の代りする
すてられた夫が広場で人を選り　和歌山市　福本英子
湧き水を掬うと母が漏れてゆく
鍵ッ子と同じ鍵持つ朝の膳　和泉市　岡井やすお
琵琶に笛朗詠流れる乞巧奠
台風の渦の真中蝶が舞う　堺市　伏見茂美
追いついてくれぬ年の差絆かな
きっと白い野花が群れて雲の峰　米子市　八木千代
静かなるたたかい衣裳に金をかけ　堺市　高橋千万子
甘栗と中也と独りのおんなの秋　和歌山市　西山幸
秋風について私も秋になる　鳥取県　清水一保
消しゴムがみんな小さい夜学生　伊丹市　樫谷寿馬
時刻表ばらばらめくる風が秋　兵庫県　遠山可住
生き恥もまた美しき紅暮緒　兵庫県　辻文平
あれよりは偉くはなれぬ俺の年　唐津市　新岡回天子
甚敵の来ぬ日ひねもす蟬の鳴く　唐津市　田口虹汀
生きねばのどん欲はない老夫婦　鳥取市　河村日満
遊ばせて貰いまっせと粋なこと　高槻市　若柳潮花
　　和歌山市　若宮武雄

萩の花もすっかりこぼれつくして、季節は儚く終り移って行きます。灯をひきよせて、藤村を口ずさみながら、ぼんやりと私の裡なる（おんな）を見つめてみるのも秋のせいでしょうか。夜長のつれづれに、若菜集に歌われている六人の女性のひとりひとりを幾度も読み返し語り合っては、おんなを想い、嘆息をついて夜を満喫しています。

しだいに齢を重ねて過ぎた年月を心寂しく追懐し「わが世の坂にふりかへり」自分の来し方を振り返った時「微笑みて泣く」涙をわが身にそそいでいる「おえふ」。剛さと弱さのせめぎ合いに身もだえする「おきぬ」。「おさよ」は「心を笛の音に吹かん」と喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、愛情、憎しみ、欲、これらの人間の「業」の数々がさまざまの音色に吹き分けられていて考えさせられます。「おくめ」の燃えるような情炎、「おつた」のパロディーとしてのおもしろさ、おかしさ、そして女性の美しさ、やさしさ、哀れさ、解きがたい神秘感のようなものをもっている「おきく」等々、女ごころの姿をそれぞれに言い表わしています。おこがましくも川柳を通じて、よりよき（おんな）になりたいと思い続けている私の、折りにふれては練る詩です。

新しい詩歌の時をもたらした藤村ですが、「言葉の奇を好んだり、句を選んだりするよりも、言葉はありきたりの言葉でいいからそこに若々しい新鮮な気持さえ表われればいい春なら春という言葉に、人生の春を意味するように新しい表わし方をすればいい」といっているのを何時も心にとどめています。

河井酔茗は「飛躍しようと試みたといっても、決して盲目的に、無謀な野心に駆られずあくまで心静かに、あくまで忍従に、心の底から沁み出るような若い生命を汲み上げた」と藤村を語っていますが、これも又、川柳をまだまだ知らない私への心すべき言葉だと考えています。芸術論的短章で藤村はよく芭蕉を語っていますが「句を作るには浅瀬を奔り流る水のごとくせよと、芭蕉はその弟子に教えたという。深く入って浅く出るという芸術の境地も思い合わされておもしろい。ゆかし言葉だと思う」。また「蕉門の諸詩人が言葉の感じの鋭さ。「わび」「さび」「におい」「ひびき」「うつり」「おもかげ」「しおり」それから「細み」などの言葉の感情とその陰影とを見よ」といっているのなどは、私の心をとらえて離しません。言葉を、詩を、新鮮にするということは、本質に対する感じを新鮮にすること、それは直接に私たちの生命からつかんで来ることによって言葉の魂を甦らせることだ「春」という言葉一つでもそれが活きかえってくることを知る喜びが詩だ、と藤村は言っています。川柳に対する時の私のこころにしたい嬉しい言葉だと思います。

「昨日またかくてありけり／今日もまたかくてありなむ／この命なにをあくせく／明日をのみ思ひわづらふ」。現実の私の貧しさを恥じながら、想いは果てしなく広がってゆく秋の一夜です。

秋つれづれ

□

西山　幸

相談

菊田 いさむ 選

商談はソロバン玉の音で済み　大柏
仏壇へ相談をする鐘を打ち　宵明
相談に背をむけ男堕させる　日枝子
行政の範囲を知った相談日　比呂志
ハイミスの決意結婚相談所　里風
相談と言って意見を押しつける　綾珠
まとまらぬ相談灰皿溜るだけ　柳五郎
アメリカと相談して来るお国柄　敏
懐と相談メニューを確める　喜酔
結局は妻と相談して建てた家　掬治
相談に義理と断りとが絡みあい　義美
相談にのればのったで尻拭い　実
相談にあえる実家のある強気　カズエ
相談に来ない分家に溝が出来　弘朗
相談の限界無心をはねつける　早苗
相談へ足して二で割ることにする　素身郎
無理にとは言わず相談かけに来る　博友
相談に乗らない寡婦の艶話し　甲子郎
大物に相談お名前かりておく　柳子
猜疑心あるから相談まとまらず　〆女
相談をして駆け落ちをすすめられ　七面山
相談に来るまで知らぬ振りの親　裕
聞き上手へつい相談をしてしまい　あき子
番長を真ん中にして善後策　峰雪
寄付金の相談なかなか口きらず　本蔭棒
相談に乗ってと誘いかけてくる　哲寿
相談所聴いてる人も涙ぐみ　凡太郎
秋風へ身の上相談目白押し　哲夫
困りごと女房に相談して決まり　春日
相談へ反対意見席を蹴り　秀峰
とまり木で野暮な相談頼まれる　洛酔
相談がこじれて長い夜となり　勝一
改めて日取りを決めるご相談　久仁於
末席にいて相談にあずからず　佳雲
相談の乗り手が殺到する美人　どんたく
本家へは相談に行く嫁のこと　明水
優　佳
優等生の返事相談にはならず　可住
相談へ無沙汰の詫びもさげて行き　久仁於
内証の相談耳もとへもってくる　亀甲
相談をされてへそくり落ちつかず　重人
相談を断わり傘だけ貸してやる　勝一
人
相談を聴くだけで足るまるい母　優
地
冷えた茶を飲んで相談まとまらず　春草
先生に相談している瞳がきれい　和子
実印の要る相談へ念を押し　軸

底

川村映輝選

どん底のくらしに負けぬ子の育ち　久仁於
底辺に生き人情が身に沁みる　美穂
底の底まで見抜かれていて手が出せず　七面山
のぞかせた底に仕掛けがある奇術　甲子郎
底辺に住んで人情味に溢れ　義美
稼いでも財布に底がないらしい　はじめ
底辺の暮し知らぬまに板につき　昭治
目の底に残るあの日の修羅の街　春日
底上げを承知で買っても腹が立ち　雅水
上げ底で過した人生息が切れ　どんたく
敗戦を生きた日本の底力　掬治
どん底を這い回っても成長し　素石
底割って話せる友がいてうれし　勝一
底なしの沼にも月は清く澄み　虹汀
好転の景気は在庫底をつき　保夫
海底へ海の男のロマン燃え　みつる
子に語る昔のどん底美化される　刀水
腹の底割って話せる友が欲し　秀峰
このダムの底に先祖の村があり　春草

着飾って心の底は覗かせず　洋々
底辺で義理人情が生きていた　素身郎
どん底を苦にせぬ母に育てられ　ひで
舟遊び底が見えると怖くなり　三五島
どん底へ勝気な妻が居てくれる　悠泉
どん底に落ち人情の機微に泣き　大柏
底辺で悔なしなさけ浴びて住み　柳子
落ちるだけ墜ちた底にもまだ底が　柳五郎
泥沼の底にも生きとし生きるもの　一路
底意地も偶には見せて男生き　ろ亭
上げ底の情けに飢える施設の子　枯梢
おだやかな流れの底にある歴史　〆女
底辺でもまれ抜かれてきたまるさ　重人
底入れの太子にドルの安定価　古都路
底見えた仕事にスコップ勇み出す　雅風
上げ底のくらしを今日も渓やまれ　凡太郎
靴音が不気味に響く夜の底　登美也
底知れぬ女の意地を垣間見る　軒太楼

佳

言い勝って孤独が責める夜の底　宵明
底抜けたような男に特技見る

軸

仮面

福田保子選

底意地の悪さが髪の型に出る　裕
底辺の声が大きな波紋投げ　木魚
茶柱の縁起底までぐっと干し　胡頽子
どん底の気らくさ虚飾のない会話　日枝子
伝説となって湖底に悲恋生き　芳枝

人

バーゲンの山は女の仮面とり　柳五郎
かぐら舞う酒と仮面に助けられ　三和
故郷の駅には仮面捨てて降り　一路
妻君が夫につけている仮面　七面山
革新の仮面をつけて旗を振り　義美
再起する門出の朝に仮面割る　右近
肩書きがふえて仮面の数もふえ　明水
仮面つけ忘れて涙ふいている　柳子
朝の靴今日の仮面を確かめる　大柏
友情に仮面は要らぬ腹を割り　テル
仮面取り去り嫁の座に腰を据え　伊津志
ほほえんだ女の仮面が持つ恐さ　公一
黙々と父が鬼面を彫っている　里風
仮面脱ぐときの素顔を整える　枯梢
仮面脱ぎ捨て遠来の友迎え　本蔭棒
燃える眼に出合うと仮面ずり落ちる　洋々
仮面つけ平和の使者でいるスパイ　峰雪
ネクタイをとけば仮面も剝げてくる　幸一
サミットの仮面と仮面握手する　どんたく
ライバルの野心仮面の下で燃え　喜酔
仮面ぬぎグラスに透かす自嘲の夜　婦美子
愛される仮面を女忘れない　刀水
栄転へ別な仮面をつけて出る　和子
父の背で仮面したまま寝てしまい　春草
選挙カー仮面の笑顔まき散らし　優
遍歴の過去を仮面に封じ込め　洋々
対決の仮面は妻が撰ってくれ　里風
明日はずす仮面へ核をたくわえる　どんたく
ほっとして仮面を外すマイホーム　ふみ
七人の敵へ仮面をしかとつけ　早苗
ほんとうの涙仮面の裏に秘め　ゆう也
満場の拍手仮面の儘降りる　洛酔
土耕す農夫に仮面など要らぬ　本蔭棒

佳

子よ父の仮面は二度と振り向くな　〆女
ひょっとことおかめの仮面で仲がいい　里風
何枚も仮面を脱いで観世音　三五島
仮面つけた孫が主役となる茶の間　公一
野心フツフツ仮面も赤味おびてくる　素身郎

人

時雨聞くこころは仮面はずしてる　英壬子

地

悲しみも仮面のピエロおどけてる　松太朗

天

反逆の仮面は笑みを忘れない　可住

軸

善人の仮面のままで幕が降り

初歩教室

題 ― 賭ける ―

本田恵二朗

『ゆとり時間なんてこれっぽちもありませんよ、全く馬車馬の毎日ですよ』と親しい柳友の一人が嘆息したが、彼は月例句会は皆出席、雑詠は毎月フル投句。それでいてゆとり時間など皆無だと思い込んでいるところが彼の善良さであるばかりか、佳きゆとりをたっぷりと持ちあわせているのだ。その貴重なゆとりを趣味と云い換えてもよい。そこで私は『君は倖せなゆとりをたっぷりと持っているではないか』と彼の作句活動振りの良さを指摘してやったら、吃驚した顔で、しばし私を見つめたあげく、少し涙ぐみながら私の手を握って歓声を張りあげたではないか。『こんな佳いゆとりを持っていたとは夢にも思ってもみなかった』と述懐する彼の目は輝いていた。ゆとりが有り過ぎると脳細胞の進化が鈍って、徐々に退化傾向をたどるのみである。心身共に寸暇なく活動している者が見つけたゆとり時間こそ生きたゆとりであり、金銭で買えない価値を秘めている。

ジャンボくじ夢を買うたと負け惜しみ　茂子
（ジャンボくじ水面の泡と消え失せる）
お互いを賭けた人生もう半ば　同
自信もち賭けたお金もさようなら　兼治郎
（自信満々賭けた札束羽根がはえ）
賭け事はやめてと神へ日参す　ふみ
（賭けごとは止めて欲しいと神頼み）
天命と思う覚悟に賭けた縁　風童
娘やるこの世最後の大ばくち　同
（嫁かせる一生一度の賭けである）
賭け事も仕事の邪魔はさけて夜　房子
（天職に邪魔せぬほどの賭け遊び）
賭け事が好きでも家計丸く住み　同
この人に私を賭けて悔いはない　康恵
（この人に賭けて悔いないほどに惚れ）
ジャンボくじにマイホームの夢を賭け　やすお
（マイホームの夢をジャンボくじに賭け）
賭けてます貴男と一緒に乗る船出　山久
トランプにアメ玉賭けてある対話　同
（アメ玉を賭けたトランプ力み合い）
己が身にはたし得ぬ夢孫に賭け　登舟
身障者再起を賭けるリハビリー　同
（汗びっしょり再起を賭けるリハビリー）
一筋に賭けた足跡振り向かず　勝美
一か八賭ける勇気は買ってやる　同
（背水で賭けた勇気を買ってやり）
夢賭けた意地は奥歯でかみしめる　句味地
夢賭けた子の溺愛の非がわかり　同
（子に賭けた夢溺愛であったかも）
片思い来るか来ないか招待状　茂美
（招待状来るか来ないか賭けてみる）
ジャンケンしても負ける父なり無趣味なり　同
（じゃんけんで負ける父です無趣味です）
吾が人生化学の道に賭ける孫　貞子
（人生を化学の道に賭ける孫）
馬に賭けするする落ちる蟻地獄　同
（賭け馬に曳かれて堕ちた蟻地獄）
子に賭けた母の躾けのきびし過ぎ　佐代子
夕焼けに明日へ賭けて手を合わす　同
（明日賭けて夕焼空へ手を合わす）
星空に明日の天気賭けて寝る　元江
（満天の星に遠足賭けて寝る）
賭好きの男に貢ぐ地獄道　同
損をした話はしないギャンブラー　凡太郎
賭ごとのような人生とも思い　同

（人生万事賭けの毎日かも知れず）
人生を子供に賭けて裏切られ　みつる
（人生を子に賭けみごと裏切られ）
鼻下長のふところに賭ける夜の蝶　同
世直しに賭ける人生　主義に生き　同
賭けてみる勇気出て来るこの若さ　千子
（賭けてみる勇気が出てくるのも若さ）
倖せ薄き過去を見に賭けて生き　同
あれこれと迷って賭けたがやはり損　瓢太
賭け事は結局儲からぬものと識り　同
（賭けごとは儲け三分で損七分）
賭けてるとなればやっぱりやる気も出　同
一瞬へ命を賭ける血が若い　英子
入園の日から未来へ賭けている　同
命賭けの女がこわいオンライン　同
（オンラインに女の命賭け捨てる）
赤信号いのちを賭けて渡りたい　健司
（赤信号いのちを賭けて渡ろうか）
男なら仕事に賭ける時もある　同
人生のドラマ夫に賭けている　公乃
子に賭ける夢はほどほど捨てるべし　同
（子に賭ける夢ほどほどに捨て給え）
関脇が大関賭けて睨み合い　忠広
来場所に賭けると横綱悔しがり　同
源平の波乱を賭ける赤と白　古都路
（源平の命賭け合う赤と白）
宝くじ万に一つの夢を賭け　同
上役に花を持たすも賭のうち　芳水
人柄に賭けて娘をくれてやり　同
一と言に賭ける煙草を深く喫い　三五島
この人に賭けよう歌ほど甘くない　同
子に賭ける親馬鹿さんをにくめない　昭治
人生に誠実一本賭けた僕　同
（誠実の二字に人生賭け続け）
賭けられた運　茶柱は知らぬこと　芳枝
（運賭けられたとも知らず立つ茶柱）
産声がもう人生の賭渡る　同
（人生に賭ける産声張り上げる）
この人と賭けた女が踊らされ　柳五郎
（この人に賭けて舞います女舞）
ワクチンへ賭けた人たちふと想う　同
ゆとりある心は賭けるものを持つ　保夫
火に賭ける人間国宝動かない　同
（火に賭ける人間国宝火ともえる）
光陰に余生を賭けるものがない　露杖
（めぐまれた余生に何を賭けようか）
青春を賭けた球児の汗光る　同
賭け好きの男が築く砂の城　胡頼子
誠意ある方へ再婚賭けてみる　同
子に賭けた夢がはじけるわが余生　同
賭けている人の心は馬知らず　武水
（賭けられているとも知らず馬走る）
賭ける気はたっぷりあります五十坂　同
一生を賭ける相手を親まかせ　利美
午後三時課長も入るあみだくじ　同
宿浴衣寝るには早い手なぐさみ　同
賭けごとの文字は私の辞書にない　武太
浅はかな考え子供に賭けている　同
茨道に賭けて明日の地図を描く　寿子
答はひとつ一途な想い賭けてみる　同
水の性に賭けた想いを流される　同
子に賭ける吾家の浮沈風を抱き　義美
甲子園に賭けて年中泥だらけ　同
政治生命賭けた達磨の両目玉　同
一命を賭けても丸木橋渡る　同

題―期待―11月20日締切（1月号発表）

宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
㊐七一一　**本田恵二朗**

中尾藻介氏より
事務所開きお祝いとして
清　酒　ご寄贈頂きました
川柳塔社

第三百六十四回（五十六年度第十回）

大萬川柳

「出逢い」入選発表

選者　川村好郎
投句総数　三百三十三句
入選　五十六句

素晴らしい出逢い日記に埋めておく　米子　瑞枝
ハンドバッグに朝の出逢いの余韻抱く　富田林　花梢
その出逢いもう友情は遠いもの　堺　まつ子
運命の出逢いへわたしを賭けてみる　堺　一二三
ときめきの出逢いドラマの幕が開く　大阪　君子
こんにちは赤ちゃんそのときめきで母になる　今治　有里
初恋の夢を出逢いがふみにじり　島取　露杖
川柳との出逢い川柳抱いて逝き　米子　日枝子

堺　千万子
出逢い待つ中国孤児の血の叫び　米子　千代
蛍火となって出逢いの灯が消えぬ　大阪　柳伸
おみくじが大胆にする出逢い　米子　しのぶ
出逢いさえなければ痛む想いなく　西宮　はつ絵
久々の出逢いレタスも新鮮で　尼崎　千子
出逢わずに置こう夢をこわすから　大阪　道子
貴方との出逢いを妬む秋の風　大阪　松太朗
家裁での最後の出逢い粧うて　大阪　好一
いたずらな神に出逢いを狂わされ　兵庫　ゆう也
かたくなな自分と出逢う夜の酒　寝屋川　度
花時計二度目の出逢い見届ける　大阪　たけし
どん底で出逢った情に今日の幸　松原　重人
値踏みする顔もまじっている出逢い　米子　みど里
文通でひかれ出逢うてなお惹かれ　米子　千春
別れてもよぎる想いは出逢いの日　八尾　シマ子
出逢ったに忘れられてる空しさよ　東予　悠泉
三十年目の出逢い中国孤児に春　名古屋　枯梢
街角の出逢いは過去を問わぬまま　今治市　胡頽子
残り火を燃やして悔いぬひとに逢い　守口　右近
悔いの無い出逢いで歩む五十年　三重　溪水
もう一度やる気にさせた日の出逢い　奈良　保夫
あれからの出逢いで他人めいてくる　尾鷲　伊津志
好きでない人にはいつもよく出逢い　八尾　美幸
ある出逢いから日記が炎えてくる　旭川　大柏
あの時の出逢いが残る帯を締め　岡山　金太郎
金運に未だ出逢えぬ太指　橋本　木魚
いいとこで出逢いましたと言う保険　愛媛　明水
傷を持つ出逢いは傷を隠し合う　愛知　甲子郎
また出逢う事なき旅のドラが鳴る　姫路　葉香
岩壁の母に出逢いはもう来ない　鳥取　秋女
お前との出逢いは神のミスだった　平田　代仕男
あなたとの出逢いあの日も雨でした　河内長野　喜酔
久々の出逢いにはずむ国訛り　西宮　婦美子
復縁の話で軋む出逢い茶屋　神戸　どんたく
ライバルの出逢い野心を探り合い
遅かった出逢い五十路で愛を知り
短編で終らぬ出逢いの幕が開く
ある出逢い過去伏せたまま描く虹
七夕の出逢いですなと迎えられ
長らえて花の出逢いを惜しむ春

佳句

富田林　花梢
その出逢いもう父となり母となり
堺　一二三
倖せに出逢わず少女鶴を折る
寝屋川　英壬子
魂のゆとりに出逢う彼岸花
枚方　星斗
職安でノータイ同士がよく出逢い
寝屋川　あいき
出逢いあれば別れがあるさと他人
和歌山　武雄

人ノ句

一期一会思えば弾む語り合い

地ノ句

笠岡・忠三
夢にみた出逢い異国のはぐれ鳥

天ノ句

大阪　ひろ子
時置いて母との出逢い許す父

選者吟

少しずつ恩を返しておく出逢い

昭和五十六年度

ベストテン（九月現在）

一	一八・〇	堺	**一二三**
二	一六・五	大阪	**君子**
三	一六・五	富田林	**花梢**
四	一三・〇	和歌山	**寿子**
五	一二・五	米子	**千代**
六	一一・〇	鳥取	**秋女**
七	一一・〇	大阪	**好一**
八	一一・〇	高知	**三吉**
九	一〇・〇	和歌山	**武雄**
一〇	九・五	大阪	**道子**
一一	九・〇	八尾	美幸
一二	九・〇	米子	雄々
一三	八・五	神戸	どんたく
一四	八・五	大阪	満津子
一五	八・五	交野	テルミ

以下略

最終回

「最終」三句以内
締切　十一月二十日

投句先
〒592　堺市堀上緑町一―三―七
藤井一二三方**大萬川柳会**

◇

永い間つづけてまいりました「大萬川柳」は「最終」を以て終止符を打つ事に致します。皆さんのご健吟を感謝しています。

（好郎）

川柳塔社常任理事会（10月1日）

（出席者）栞・好郎・薫風・水客・形水・紫香・萬的・岳人・与呂志・柳宏子・鬼遊・史好・文秋・瓢太・吸江・酔々。

▽議事並に報告事項△

★栞氏より、11月8日NHKラジオ第一放送で午前10時より11時まで、川柳特集がある。本社10月句会で一部録音どりを行う旨報告があった。

★好郎氏より決算について一応の説明があり詳細な決算報告は同人総会で行う。

★上田翠光氏に参事委嘱の提案がなされ、満場一致で可決。

★本社句会費を五七年一月句会より五百円にする件。可決。

★塔誌上に、自選欄を設立する案を編集部より提案。次回へ継続審議とする。

（記録・酔々）

▼**11月**の常任理事会は**2日**（月）

書評

川柳読本　岩井三窓

橘高薫風

綴方貧しき父は母を打つ
ひとり生く柳多留にもあるごとく

前者は、句集「三文オペラ」の序で岸本水府が、正に初心時代にたたきあげた正直な手法が生み出した新鮮な本格川柳の精華である、と激賞した句であり、後者は、筆者が著者三窓（独身時代）を最も端的に表わした作品として一読感じ入った句である。釜めし、たこ焼、お好み焼や落語が頻繁に出てくる庶民の世界に生きる著者を、大まかながらも据え付けている。

醤油を提げてまったく詩心なし
貧しければ馥郁としてリンゴの香
どぶろくにえり子の声を肴とす

「三文オペラ」の卓抜な抒情から、作品は諷刺へと変って行く。荒廃した戦後から弛緩した平和への時代相の変化や、作者の年齢が背景にあって大きく作用しているのだが、詠みたいものを詠む、詠みたいものしか詠まぬの作家魂を著者から学び取るのである。

当分はこのおめでたい石鹸で
あるときは劇画あるときは火炎ビン
信号が青でも動かないんです

著者の筆の立つことは、「岩井三窓の人と作品」の項で、友人の中尾藻介が「川柳を愛し、川柳を憂い、川柳に遊ぶ」は川柳生活満四十年の三窓さんの信条であり、実践の集約である。口下手で口数が少ない分だけエッセイの量は多い。「まあ、読んでみなはれ」と書いているが、小文の小太刀の冴えは縦横無尽と云える。一気に読ませるのだ。一文を引く。

なんぼ

「われ、なんぼのもんじゃい、男同士で、勝負したろか」という、歌詞より台詞の方が長い演歌、「やられ節」なるものがある。作詞・深作欣二、唄うのは「やられ役」専門の川谷拓三という映画俳優である。汚い、柄の悪いことばを、巻頭に持ちこむのは気がひけるが、なぜか、この台詞が私のこころを打つ。負け犬の絶叫ともとれるこのことば、捨て身の情熱といったものも感じとれる。この「なんぼ」の関西弁。何がいくらという意味が隠されているのであろう。「肩書」「階級」「実力」「知能」「腕力」「勢力」等あげれば限りがない。つまり、いくらの値打ちのある男であろうか、という意味ではあるが。他の世界はいざ知らず、川柳の世界でのこの「なんぼ」は、肩書でもなければ、勢力でもない、句そのものでなければならない。

人の社会、人の一生、すべて勝負につながるものであれば、川柳の世界も例外ではない。

この勝ち負けは、終局的には、句の力によって左右されるものでなければならない。

たよるものは、自分の句しかない。自分の句以外のものに頼るようになったら、それはもう邪道である。

「われ、なんぼのもんじゃい、男同士で、勝負したろか」

よい台詞であると思う。（昭和51年6月）

一読をお奨めする。発行所は創元社。定価二千円、送料三百円。本社でも取次きます。

柳界展望

（原稿締切毎月末）

集録・香川酔々

■第4回岡山県歳末川柳大会が左記の要領で開催される。ちなみに、本大会は、ますかっと四五〇号記念も兼ねている。

日時・12月6日（日）午前10時。

場所・岡山市小橋町岡山中央公民館。

兼題と選者（各題2句）

夜（青山岳峯選）日和（西山茶花選）野心（白岩文衛選）汲む（石部明選）誤解（安東千世子選）ジュース（当日発表）号令（同）

会費千円。

後援・岡山県並に市教育委員会。

主催・川柳岡山社

■柳都川柳社では、大野風柳著「鑑賞川上三太郎単語」を発行。四百円（送料共）申込先・〒956新津市秋葉1—8—9

■「鶴彬の軌跡」岡田一と著が発刊された。鶴彬研究資料として必見の書といえよう。

発行所・〒921金沢市八日市3丁目13文芸集団。定価八百円。

■菅生沼畔著「普門苑雑記」が発行された。著者は、柳誌「ひろしま」の編集者である。非売品。発行者は東広島市西条町田口、菅生尚範氏である。

■川柳宮城野には、川柳アラカルト欄があり、全国柳誌七月号推薦句を記載している。塔誌より、

ガス自殺出前の鉢を置いたまま（紫香）美しく老いてゆく日の彩を撰る（〆女）寝たふりと知っているから独り言（芳子）横ビンタくれた老師を囲む酒（代仕男）花束を受けて今日から姑となる（菊野）貯め込んだ女おとこを近付けず（花代子）

■堀口塊人氏追悼川柳大会が開催される。

日時・12月6日（日）1時

場所・吹田市立北千里地区公民館。（阪急北千里下車南へ歩4分）

兼題と選者（各題2句）

そば　伊藤　入仙

秤（はかり）　鵜飼　蟻朗

芝居　亀山　恭太

商社　橘高　薫風

新聞　久保田以兆

大陸　広瀬　反省

会費・千五百円

主催・川柳文学社

▽**同人・柳友消息**△

▼林露杖氏（鳥取県）は山陰柳人の話題を呼ぶ茗人賞に選ばれた。

▼八木千代さん（米子市）も同じ茗人賞準賞に輝いた。手話の子の笑顔に音の色がある（露杖）先頭の蟻で疲れを覗かせぬ（千代）

▼川柳孔雀主幹・堤八郎氏（久留米市）は、去る9月8日大阪ロイヤルホテルで藤原弘達氏と対談され、有意義であった由。

▼藤井明朗氏（島根県）は第2回雲南婦人川柳作家の集いに参加。（9月6日）本社へ寄書きを送られた。

▼尼緑之助氏（出雲市）は編集部へ近況を寄せられた。川柳普及にご多忙の由、有難いことである。

▼南得二氏（大阪市）古川柳研究会で輪講にお忙しいとのことである。

▽**日川協通信**△

▼六月東西合同常任理事会

中島生々庵理事長の辞任申出を了承、後任理事長として左記の者を選任することを全会一致をもって承認

「現代川柳の鑑賞」

山村祐・坂本幸四郎共著

明治・大正・昭和三代。久良伎、剣花坊から現役若手作家まで60作家を柳史に沿って配列。（川柳塔関係では麻生路郎、橘高薫風）

厳選された秀句の鑑賞を中心に、現代川柳の流れ、時代の背景と特質、作家論に及ぶ—両著者の視野の広さ、作品と作家、川柳に寄せる愛が行きとどいた好著。坂本氏が戦前編、山村氏が戦後編を担当。

・四六判上製　11月20日刊

・一七〇〇円（送料二四〇円）

〈発行所〉

〒160　東京都新宿区百人町1—23—14

たいまつ社

電話03(371)1590　振替・東京四—三四三六二

可決

▼七月常任理事会

西独政府派遣の短詩文学研究者、ハラルド・K・ヒュルツマン氏を日川協客員として遇する件は満場一致をもって承認可決

〈ごあいさつ〉

私儀昭和54年11月以来、日川協理事長として、皆さまのご支援によりその職責をけがしてきましたが、このたび健康上の理由により辞意を表明してきましたところ、幸いにして日川協もこれを了承せられましたので、ここに辞任することとなりました。在任中は種々ご指導とご鞭撻にあずかりありがとうございました。ここに謹んで各柳社のご発展と柳友各位のご健康ご多幸をお祈りして、退任のご挨拶といたします。

昭和56年6月20日

日本川柳協会

前理事長　中島生々庵

……

私儀このたび皆さまのご推挙により、日本川柳協会理事長に就任いたしました。もとより凡愚鈍才にしてその任にあらざることを十分承知しているものでありますが、何とかその重責を全うしたいものと念願しています。

どうぞ皆様のより以上のご支援とご協力を心からお願いいたしまして、私の就任のごあいさつといたします。

昭和56年6月20日

日本川柳協会理事長

藤島茶六

新参事紹介

奈良県　上田翠光

▽句会案内△

■**菜の花句会**

時・11月10日（火）夕6時

場所・西郷会館（八尾神社境内）近鉄線八尾駅下車

兼題＝大阪風景（西尾栞）血（香川酔々）みそ汁、煉瓦、忘れる

■**南大阪川柳会**

時・11月19日（木）夕6時

場所・高松会館（環状線寺田町駅下車）

兼題＝重点、従順、住宅、渋滞、充分

■**東大阪川柳同好会**

時・11月28日（土）夕6時

場所・東大阪中央公民館

兼題＝米、音痴、機嫌、頼る。

■**駒つなぎ亡年句会**

時・11月30日（月）夕6時

場所・高松会館（寺田町）

兼題＝手本、時間、大人、終り。

■**堺川柳会**

時・11月15日（月）夕6時

場所・堺市民会館（南海堺東駅下車歩10分）

兼題＝近所、やさしい、区別、深まる。

錦秋北九州の旅

臼杵の石仏／荒城の月の岡城趾／北原白秋の柳川の舟下り／菊池温泉の吟行句会

■**スケジュール**

昭和56年11月14日（土）大阪南港（17昭）出発。

15日8時別府港着—大分石仏—岡城跡（昼食）—菊池温泉・望月旅館に宿泊。

16日菊池温泉9時出発—熊本市内観光（水前寺公園）—11時50分柳川（舟下り後御花にて昼食）—15時大宰府—福岡空港18時～20時—大阪空港。

■**集合**　11月14日（土）大阪南港関西汽船フェリ—乗場午後4時乗船待合室（時間厳守）

■**兼題**　（15日夜句会）「城趾」「石仏」「川下り」

■**会費**　四万五千円

■**定員30名**　（申込順）　窓口—栞・岳人

主催　川柳塔社

56年度二賞発表句会と同人総会

会場　なにわ会館―大阪市天王寺区

日時　10月4日（日）午後2時～3時30分

本日は晴天なり、本日は晴天なりとマイクテストのような、すばらしい快晴。定刻総会の幕が切っておとされる。司会はお馴染み柳宏子氏。まず好郎氏の開会の辞から。主幹も快方に向われ何よりのことである。大いに塔の前進をはかろうではないかと力強い開会の辞である。ついで、主幹の名代として、小石夫人のご挨拶。主幹はぜひ出席したいとのことであったが、なお大事をとって夫人が出席されたのである。

つづいて、栞主幹代行より、挨拶並びに経過報告。（この一年の経過を次表にまとめておく。記録者酔々）

55年10月12日・不二田一三夫氏告別式（八尾文化祭と重なり心残りであった）
11月3日・高橋可保留氏逝去
11月23日・伊藤茶仏氏句碑建立
12月14日・堀内塊人氏逝去
12月14日・津田与史氏逝去
56年1月15日・本社新年おめでとう会（はるばる恵二朗氏、久米雄氏、柳慶氏、文衛氏他多数参会）
3月24日・麻生葭乃先生逝去
5月10日・前山北海氏来日
5月20日・菊沢小松園氏入院（療養中）
5月26日・小西無鬼氏逝去
7月26日・板尾岳人氏金剛登山五百回記念句会（八尾日本海にて）
7月30日・小谷葉子さん退職（有難うございました。）
8月9日・佐伯越子さん逝去
9月1日・本社新事務所開設
9月3日・事務所開き・事務開始
9月6日・山内静水氏家族句集「おかげさま」発刊記念句会（於竹原市）

ついで、来年5月は、川柳雑誌より塔に改称して二百号に当たるので、記念事業を行いたい。各自プランを持ち寄って欲しいとの提案がなされた。

ここで議長に栞氏を選出。多久志氏より詳細な会計報告が行なわれる。報告後、多久志氏は同人雑誌のあり方について、きわめて有意義な意見を述べられた。

質疑応答に移り、栞議長より新事務所開設についての説明があり、各位了承。

山内静水氏より、竹原大会について謝辞を述べられた。

最後に、議長より上田翠光氏に、新しく参事を委嘱した旨発表があった。（10月理事会で承認済）閉会の辞は、ご存じ閉会の辞の人小松園氏が残念ながら入院加療中のため、代って黒川紫香氏によってなされた。

（香川酔々）

《同人総会出席者》

多久志・静水・柳宏子・滋雀・太茂津・武雄・鬼遊・与呂志・敏・凡九郎・酔々・悦郎・好郎・萬的・十郎・喜一・客遊子・紅月・喜風・光輪・旋鳳・三千四・栞・文秋・潮花・水客・紫香・翠光・瓢太・小石・吸江・弘生・幸生・綾珠・鎮彦・寿馬・規不風・桐下・射月芳・一二三

本社 十月句会

会場　なにわ会館

四日　午後5時50分

快晴の秋日和、私は、天理市の奥山へ、松茸取りに連れて行ってもらったが、一本の松茸にも出会えず、行きしなに、確かめてあったアケビの一群へ取りかかり、大いに収獲にありついた。それを持って、本社句会へ出席。最初は、句会部の方々に一個ずつでもと思って行ったのが、NHKの録音取りで、川柳塔へこられるとのことも聞いていたので、その分は残し、全部配り終え、句会の段取りにかかる。

今日は、二賞（路郎賞・川柳塔賞）の受賞式も兼ねるので、句会部員は一丸となっている。

おはなしは、西尾栞主幹代行の句が載っているコラムのコピー（岸本吟一先生から贈られたもの）、吉川英治氏の句や、時実新子氏等その他諸先輩の句や、それらの句評等のおはなしが栞先生の独得のユーモアをまじえた

喜びの受賞者―前列右から大矢十郎氏、西尾栞主幹代行、矢野佳雲氏。後列、西村美佐女さん

おはなしも時間通り終り、いよいよ句会のはじまりである。

今日は、呼名係りに抜擢され、幸生さんと敏さんが補助して下さった。

今日の初出席者の中で、特筆されるべきは勝山双葉川柳会の九人の美女、その中の一人、美佐女さんが、川柳塔賞受賞をされた。今後共一層の御健吟を御祈りします。

その他、多数の方々が遠くから御出席下さいました。やはり川柳塔社を愛する方々の力が、今回の句会を盛り上げて下さったことを心からよろこんでいる次第です。

月間賞は松本涼一氏に輝く。

（那須鎮彦）

（受付―与呂志・重人）

（進行―柳宏子、記録―鎮彦・幸生・敏）

出席―喜風・綾珠・三十四・佳雲・柳宏子・弘生・好郎・文秋・多久志・滋雀・美智子・好子・紅月・萬的・水客・紫香・一二三・潮花・寿子・鬼遊・与呂志・翠光・雀踊子・吸江・静水・悦郎・寿馬・武雄・桐下・旋風・太茂津・規不風・光輪・十郎・智子・節子・千里・智慧子・凡九郎・英壬子・いくの・酔々・君子・良子・芙佐女・秋子・田鶴子・メ女・栞・岳人・幸生・射月芳・勝美・敏・トメ子・鎮彦・史好・花梢・喜一郎・形水・登志代・柳志・光代・きみ・茂雄・川狂子・憲祐・健司・庸佑・千万子・茂美・眉水・度・雅風・静歩・柳伸・武太・頂留子・楓楽・重人・喜一・まさ子・白兎・寿美子・涼一・善紫・小路・山久・千代三・薫風。

席題「予算」　矢野佳雲選

足早やの秋へ予算を立て直す　智子

張尻が予算通りになる魔法　美智子

背伸びした分だけ予算くるい出し　節子

お地蔵さん立てる予算で村が揉め　酔々

二、三本柱を抜いた予算組む　健司
娘のかど出予算の枠へ目をつむる　一二三
ダイヤ買う予算は別に持つ女　岳人
ゴロの良い数字で予算手を締める　一二三
幹事今日足が出そうなので酔えず　小路
顔ぶれを見てから予算集められ　度
予算などない会計でくたびれる　柳宏子
白浜で予算を流す年度末　柳志
予算表隠し資産にふれてない　凡九郎
つつましい予算で親子の膳がある　与呂志
二、三枚多目に入れて出るデート　翠光
一人旅予算通りの旅をする　紫香
別枠がないので幹事落ち着けず　武太
足出した分は自腹と決めている　柳宏子

栞主幹代行から賞状を受ける大矢十郎氏

要るだけは要ると予算嫌う妻　トメ子
大らかな心で予算など組まぬ　まさ子
月々の仕送り母へ組む予算　喜風
予算から女の貌が覗いてる　白兎
予算案終った拍手で目を覚し　喜一
国守る予算むかしもそうでした　鬼遊
予算まださっぱり立たぬ新世帯　旋鳳
吾が家の予算知ってるちびた靴　雀踊子
大物が居てすんなりと行く予算　柳伸
灰皿の中で疼いている予算　〆女
一応という予算には裏があり　多久志
復活折衝母さんの肩もみながら　楓楽
予算もうとっくに越えた荷を飾る　重人
経済を出ても予算は妻まかせ　勝美
どん底の予算を亡母は見せず逝き　規不風
ふところ手予算は妻が持っている　雀踊子
寄付いらぬ方の予算へ手を上げる　頂留子
予算にも少し内緒の項作る　いくの
里へ泣く分も予算に組んでおり　重人
千円分軍艦マーチをききにゆく　憲祐
予算まだ少しあるので花を買う　岳人
子沢山予算は立てただけのこと　佳雲

席題「大声」　大矢十郎選

合格発表大声明るく弾んでる　節子
大声で名前をよんでほしい仲　光輪
子のけんか大声になる家の前　〆女
大声をピタリと止めて美人くる　幸生
滝にきて夫婦大きな声になる　花梢
覚えとれと云う大声の負け惜しみ　滋雀
大声で叱れば大声で答え　庸佑
大声で呼べばみんなが振りかえり　紫香
ドラマより大声になるコマーシャル　鬼遊
天性の大声内緒にはむかず　佳雲
マイクなどいらんとやおら立つ地声　翠光
大声で野党の信念守り抜き　茂雄
社訓読む声が廊下へつつ抜ける　潮花
大声を指一本で窘める　智慧子
でかい声ただするだけで覚えられ　静水
大声の父にびくともしない母　寿馬
大声で刑事の一人どなりつけ　栞
大声が出せず尾灯を見る別れ　美智子
サラ金の催促二階へ突きぬける　武太
大声で話す邪心のない男　文秋
大声へ少年ウソの自白する　涼一
大声を出しても解決にはならぬ　頂留子
大声を出合いがしらにとがめられ　頂留子
気の弱い分大声でカバーする　重人
大声を出すと出てくる国訛り　勝美
快復に向う大声なら嬉し　まさ子
大声でしゃべるマイクが泣いている　度
大声の癖が戻った快復期　武雄
大声になるとき私負けている　雀踊子
憤懣の声が大きくなる辞表　滋雀
悪いことできぬ大声の持主で　敏
大声を張り上げ頑固なおらない　旋鳳
大声の主で内緒は外される　弘生
大声を出してる男のせまい視野　悦郎

会議がもつれ大声になってくる　文秋
大声が取柄で号令掛ける役　綾珠
切り札を握り大きな声になる　一二三
大声の男は小細工考えぬ　射月芳
大声で泣けそう一人浜に立つ　美智子
大声を出さずにすんで平和なり　田鶴子
ふところの寒さ補う大声で　十郎

兼題「直感」　高杉鬼遊選

ラストチャンス第六感に胸騒ぐ　白兎
直感が判らぬカルテ読んでいる　柳宏子
マイナスになる直感はよく当り　英壬子
解答は直感次第○と×　佳雲
愛犬の直感不倫を嗅ぎわける　どんたく

おめでとう西村芙佐女さん

直感のあるのもないのも酔いつぶれ　静歩
直感がはずれ三人目も女　潮花
ゴキブリの髭は直感だけに生き　寿馬
直感で主人を出さぬ電話口　鎮彦
直感の差を見せつけるピカソの絵　武雄
直感は猫と鼠のデカとスリ　弘生
思春期の直感不意に身がまえる　滋雀
鼠捕りかしこいねずみかからない　紫香
直感は脳の重さの外にある　幸生
足音へもう引っ込めた亀の首　紅月
直感にすがるツバメは旅に出る　柳伸
直感へ青い果実は熟れはじめ　寿子
直感のはずれた一人いわし雲　栞
脳天をピクリとさせた第六感　眉水
税吏の直感もっと出るもっと出る　吸江
直感の鍵は無口な妻が持ち　悦郎
直感が当ると鼻が高くなる　柳伸
直感の冴えありいささか短気者　三十四
直感のブレーキ遅し鼠取り　翠光
ナメクジの直感塩とすぐわかり　佳雲
人見知りする子が知ってる温い人　憲祐
布団干しながら直感に耐えている　水客
直感もあっておやじの海は晴れ　桐下
直感と違うてましたお付き合い　小路
ある直感江差追分雪になる　岳人
ピンときて二人にしとく座をはずし　好郎
さわやかな直感萩が散っている　太茂津
直感にポキリと首の骨が鳴り　吸江
ピンときたこれは悪い話だな　健司

56年本社句会全出席者（10月現在）

宮園射月芳・飯田悦郎・横地雅風・北勝美・高杉鬼遊・米田喜一郎・山本規不風・清水健司・梅原憲祐・二宮山久・西尾栞・玉置重人・那須鎮彦・岩本雀踊子・正本水客・香川酔々・荻田川狂子・板尾岳人・若柳潮花・花田千代三・藤田頂留子・山本桐下・塩満敏・山添眉水・金井文秋・阿萬萬的・西田柳宏子・松原寿子・松本涼一・児島与呂志・江口度

直感がにぶくていつも丸くいる　美智子
恐いのは妻の直感だけである　寿美子
直感で分るこいつも酒飲みだ　史好
風邪の妻直感少し狂い出す　度
直感がやがて寂しい酒にする　光代
予言者の直感なまずあばれ出す　雀踊子
待つ人ができ直感が冴えてくる　鬼遊

兼題「歯」　野村太茂津選

お迎えが来そうな歯やけど蛸が好き　小路
なんぎなことに蛸酢が好きな総入歯　静馬
ボーナスがこれに化けたと歯を見せる　きみ
退職金で入れた金歯がよく光り　紅月
高価かった入歯の話ばかりする　寿美子
無為の日が続く朝の歯を磨く　君子
白い歯を見せて落し穴を掘り　茂雄

叱られてから奥歯がうずき出す　美智子
豆を噛む老母の入歯が噛えない　智子
歯の抜けた鬼がポックリ寺へ行く　射月芳
ホラ吹きの男の前歯欠けていた　萬的
歯に衣着せると心まで鈍る　弘生
歯には歯とさけぶ入れ歯がかたついて　頂留子
漬物の歯音まぶしくなる飯場　柳伸
あだし野に埋めてあるのは親知らず　酔々
歯ぎしりへ一本の筋崩せない　寿子
そら豆の固さに入れ歯気が長い　規不風
糸切り歯抜けて女の彩あせる　好郎
歯応えのない素直さを持て余し　一二三
歯を抜いてそれから愚痴が多くなり　智子
ただ酒で歯の浮く話聞かされる　水客
歯の抜けた夢で一日ふて寝する　潮花
善人の顔で奥歯を噛んでいる　佳雲
金冠の中に歯科医は自負詰める　弘生

入れ歯まで俺には馴染みにくそうで　凡九郎
ガタガタの歯で占い師稼いでる　鎮彦
一本の乳歯が笑っている未来　美智子
乳母車生えかけの歯をのぞかれる　英壬子
平凡な日でありますように歯を磨く　重人
逢うている時は忘れる歯の痛み　史好
憎い男の情けにもろい糸切歯　鬼遊
かばのあくびをじっとみつめている歯医者　度
小さい歯が二本並んでいる笑い　まさ子
歯が少し動き聴病者になる　悦郎
歯に衣きせず握手をくり返す　水客
税務署で金歯はのぞかさぬ様に　雀踊子
みそっぱで一人前の事を言う　庸佑
欲というものがないから歯がたたぬ　史好
丸かじり歯は青春の音をもち　君子
さわやかな音で林檎は噛られる　太茂津

一分間の柳論

石垣花子

未だ川柳の根が下せないのに、柳論を載せて頂くなど恥しい限りと思いますが。難解句や接木のような新しい句が近頃めっきり多くなり、句会にも意味不明の句が上位に抜けたりする度に、自信喪失症になり、古い頭ではついて行けそうにないからもう罷めようか、なぞと二、三日考え込むけれども、惚れ込んだ弱味は私なりの句を作っておればと、気を取り直し、穿ちやユーモアの有る句集に出会うと恋人に出会ったように嬉しい。古いと云われても仕方が無いと思っている。今一番の目標は、丸味の有る素直な句、川柳らしい句がさらりと出来たらと云う思いである。また人間陶冶の詩である以上、それなりの勉強を忘れまいと思うております。

兼題「返事」　黒川紫香選

お答えをします鋒先避けている　憲祐
人恋し出席しますと返事する　いくの
訂正は出来ない父の言う返事　悦郎
その返事代筆でくる男文字　花梢
絵葉書に返事一行書いてある　酔々
老妻へ返事がわりの咳一つ　幸生
返事するだけの役です初舞台　寿美子

昭和56年度大阪文化祭
第33回 川柳大会

日時　昭和56年11月21日（土）
11時開場、午後一時締切
会場　中央公会堂中集会室
兼題　地下鉄「淀屋橋」中之島公園内
「窓」　永田帆船選
「道」　岸本吟一選
「有」　西尾栞選
「時事雑詠」　広瀬反省選
「鳥」　墨作二郎選
「解禁」　久保田以兆選
席題　当日二題
出句　各題二句、出句は出席者に限る
賞　府知事、大阪市長、府・市教育委員長から「川柳賞」選者から「選者賞」贈呈
会費　五百円（発表誌代含む）

言葉尻捉えて返事にそつがない　太茂津
精いっぱいの返事どこかに淋しそう　悦郎
お駄賃をはずむと云えばいい返事　楓楽
あねいもと返事するのは姉ばかり　健司
返事くれぬ人とわかっている便り　花梢
薄情な返事を暫く待っている　水客
丁重にインターホーンから返事　敏
良い返事待ってまっせと電話切れ　庸佑
ガタピシと襖を締めたのが返事　智子
まだ脈があるとにらんだ生返事　吸江
イキのいい返事がかえる魚市場　翠光
本当は好きで返事は延ばしとく　佳雲
催促のあるまで返事ほっておく　形水
断りの返事は活字で返って来　与呂志
よい返事母それだけで満ちたりる　鎮彦
酔うている父の返事はあてにせず　節子
美しく冷たい交換手の返事　喜一
断りの返事とうとう出しそびれ　英壬子
返事してあらわれたのが親父さん　寿美子
達筆の返事アチコチ分らない　千代三
言いにくい返事はコーヒーのみながら　静歩
電話での返事確かな女の声　山久
返事かも知れぬポストに音がする　一二三
一方通行と思う手紙を書くも母　君子
丁寧な返事結局断られ　柳志
返事待つ郵便受に音がない　滋雀
茶柱へ妻浮きうきとした返事　潮花
よい返事欲しいポストを撫でておく　美智子
ウンと言う返事を妻が嗅ぎわける　幸生
二つ返事で核心にはふれず　水客
筆不精のくせに返事は早く欲し　文秋
二三日置いて仲人のいい返事　好郎
いきいきと台所から来る返事　紫香

兼題「女神」　川村好郎選

バイブルを落した女神佇ちつくす　白兎
女神には遠い女房の高鼾　まさ子
テレサ女史この世の女神かも知れず　美智子
どう見ても女神と見えぬ倦怠期　柳志
女神とも山の神とも思う時　花梢
水をにらんで女神自由に飽きてくる　水客
女房を女神と思った日のレター　栞
あの時の女神口あけ眠ってる　光代
痛烈な単語を持っている女神　幸生
白い雲少年なりの女神像　頂留子
お多福の面を付けたい日の女神　寿子
幸運の女神トロフィーに乗って行く　文秋
愛憎の谷間で女神微笑する　太茂津
さりげない女神切り札持っている　悦郎
カマキリに化身する日もある女神　弘生
貸しおむつ夜の女神の泣きどころ　吸江
生活の為めに女神になる化粧　形水
献身の看護女神の妻がいる　登志代
女神にも鬼にもなった母の道　茂美
レーガンへ平和の女神横を向き　多久志
愛の矢の届かぬ先に立つ女神　茂雄
秋深む女神人恋う日もあらん　翠光
女神像描けばどこやら母に似て　楓楽
サロンパス匂わす女神となりにけり　静水
酔う程に妻も女神に見えてくる　千代三
信じきる女神の御手の中にいる　光代
ヘアーピン一つ女神の忘れ物　鬼遊
血の汗を勝利の女神見逃がさず　一二三
含ませる乳房は女神の相を持ち　どんたく
一日一善きっと女神に出会うだろ　涼一
しまりやの妻を女神と思う日も　好郎

●時実新子
「花の結び目」
—新子の表現十二章—
句集『新子』以来瞠目のうちに展開されてきた新子句の世界。現代川柳の一頂点を創った作家が自らを露わにしながら書きおろした川柳私史。人びとは本書によって現代川柳の世界と、この稀有な作家の真髄を知ることとなろう。
■四六判上製　10月20日刊
■一七〇〇円　（送料二四〇円）
〈発行所〉
東京都新宿区百人町1—23—14
たいまつ社
電話　03・371・1590
振替　東京　4—24362

■**原稿用紙を使用**。締切毎月末着便まで。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

（整理・香川酔々）

勝山双葉川柳会　河野　君子報

盆休み街の吐息が聞えそう　田鶴子
高速がついて裏街陽が当り　俊　子
村祭り団地の街にうけつがれ　洋　子
夏の街秋のモードが競い出し　喜代美
真夜中のどこかが起きてる街の音　頂留子
原爆忌核ある限り晴れるまい　秋　子
気晴らしに訪ねた友の愚痴をきく　節　子
言い訳も出来ず俯く嫁がかわい　藤　子
秋晴れて猫のひげがピンとする　芙佐女
反抗期言い訳もせず背なを見せ　千　里
言い訳の電話くどくど長くなり　いくの
ゴム長で内儀さんせっせとよく稼ぎ　智慧子
母となる自覚へかかとの低い靴　楓　楽
セールスマン靴の先まですきがない　妙　子
秋の空写して鏡になるプール　君　子

駒つなぎ川柳会　里　小路報

なげやりな男で万年係長　柳宏子
小企業鮒には鮒のボスがいる　鬼　遊
真夏日に冬の寒さを恋しがり　射月芳
エンゼルがレモンの種を置いてゆき　柳　柚
身勝手な人と知りつつフラフラに　嘉住子
身を寄せる男の肩が小さすぎ　健　司
放蕩の果てをレモンのひとしずく　育　園
家伝薬レモンの汁も少し混ぜ　酔　々
なげやりな女で汚れた足の裏　眉　水
ママ過保護なげやり癖に育てあげ　潔
過保護から見たなげやりの健康美　儀一
なげやりにするなと自転車錆びている　雅　風
なげやりの癖して運を口にする　憲　祐
迷路抜けると祈りを忘れてた　美　代
なげやりの部下に手を焼く廻り椅子　善　紫
お互いのなげやり友情深くする　悦　郎
なげやりになったらツキが廻って来　柳　伸
なげやりな親子なげやりを注意する　綾　珠
なげやりな風吹きぬけるヤジロベー　美　幸
なげやりになるまい妻も子もみてる　鎮　彦
なげやりな女で爪に垢を貯め　千代三
なげやりな友のすき間を埋めてやり　雀　踊子

富田林富柳会　板尾　岳人報

物価高線香花火も細うなり　節　子
遠い日の花火は私の過去の彩　美　代
夕立へ金魚あわてぬ水の中　岳　人
演出の冴え夕立の後の虹　浜ッ子
夕立で露天の野菜安くなり　美　緒
墓参り夫婦喧嘩も申し上げ　花　梢
墓参り石碑で分るお家柄　美佐子
花火良し酒良し友良し料理良し　かよ子
稲光りあれも花火か開きに来る　き　ぬ
戦火より花火でこがす空平和　澄　子
夢でみる豪華花火は母とみる　利　重
花火師に相続税が気にかかり　庄太郎
せがまれてTVあきらめする花火　勇
青春は肩組んだままの俄か雨　きみ江
里を出て錦かざらぬ墓参り　正　信
墓参り隣りは洋酒好きらしい　柳　太
大花火重なり開く大きい傘　力津子
平和とは花火大会焼夷弾　泰　子

川柳高知　川竹　松風報

もう泣かぬ位牌に誓う自立の日　秀　子
仕掛けとは知らずにのった酒の酔　一二三
クーラーが無いからうまい冷や奴　三　吉
幸せは比べられたり比べたり　広　風
姑となる心がまえを姑に聞き　菊　野
朝顔の蔓導いて朝の飯　竹　萌
おらんくの海で釣ったと鰹売り　登　舟
門構えぐらいに機先制せられ　つぎお
大声で話す男で毒がない　とみ子
洗い髪海から上る人を待つ　節　子
海荒れて今宵は父が居てくれる　松　風

川柳ささやま　河原みのる報

手さぐりの老いが自画像描きかえる　ゆう也
仏壇へ寡婦手さぐりの掌を合わす　可　住
手さぐりで机の下でする握手　近　郊
手さぐりで稼ぐ詐欺師に爪がない　百合子
開発を待つ夏草の茂りよう　ひか平
夏草へ裾を乱さぬ寡婦の意地　文　平
夏草も夜露の恵みで息をつぎ　エキオ
夏草にふれて赤字の貨車が過ぎ　越　山
好物を貰って頭よけに下げ　くにの
先方の好物何かと気を配り　和　人
旅土産褒めてわかめを又貰い　宗　珠

平均を抜け出す部屋の灯がともり　ゆきお
満員のベッド平均寿命のび　美智子
平均点以下で家庭の和を保ち　素水
平均に吊橋ゆれた日の平和　和子

虹川柳倶楽部　新岡回天子報

中性子爆弾かかえた国と手をにぎり　実
長生きもはたで見るよに楽でなし　勝一
焼酎を相伴したい蚊の集い　素石
水着群れ西瓜を叩く笑い声　正敏
すねた甲斐あって手にしたニッサン車　千代
天狗面裏から見れば低い鼻　一竿
ほろ酔いの妻に吐かれて困るドロ　四郎
泣いている子が得をする土産物　久仁於
ほろ酔いの女戯ら軽くうけ　義美
羊羹のように生垣刈り込まれ　掬治
碁敵の来ぬ日ひねもす蟬の鳴く　虹汀
投句まだ来ない彼奴は何してる　回天子

川柳化粧櫓　植村客遊子報

盲判押すだけの廻椅子に掛け　紅月
野生猿が迎えてくれたいろは坂　秋月
怒鳴られた憤懣コップ酒に酔い　岳詩
ベッドからぬけ出すようになった足　奮水
判断が甘い登山の迷い道　実男
錬金術知ったばかりに勇退し　越山
安泰の祈願を込めて地鎮祭　永楽
十人の人に好かれるむずかしさ　大鷹
札束を握ったとたんに人を変え　拍秋
外孫は区別が出来ぬポチ袋　三青
一行の活字となって僕が居る　葉香
しゃっくりが止ったはずれの宝くじ　白李
原因のわからぬままに左遷され　遊香
収穫を天中小と出荷され　多津
十字架の重さに堪えている涙　冨多葉
三振が続き落語に切り替える　客遊子

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

病床の母の姿が小さく見え　志保
空振りもあるさと笑って世を渡り　秀穂
空振りのバットだらりと苦笑い　敏明
雷も怖いが世相はなおこわい　ふみ
雷が時計の音まで持ってゆき　タケノ
ステテコで踊った写真が届いたり　輝水
手も足もあずけて日本踊らされ　鈴江
振りあげた拳あたらぬように振り　歳栄
車椅子せめて踊りの輪のそばに　美栄
空振りで半生過した味気なさ　清夢
さといもの露真珠としておどる　はるみ
盆踊り左り前の娘どこの子か　芳枝
香煙の中に雷の声を聴き　清泉
振り逃げという手もあり思いつめるなよ　白汀

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

急停車犬一匹に冷汗し　三十四
冷汗のかわく間もなし子沢山　美子
正念場行場でゆるむ命綱　弥山人
冷汗をかかせやんちゃな子が育ち　文秋
空中ぶらんこピエロが足を踏み外し　孤舟
実力が暑さのせいでくるい出す　喜一郎
実力者錆びた銅像が立っている　悦郎
実力者マリオネットのかげにいる　度
実力の通り評価が気に入らず　柳宏子
豪快な男実力持っている　綾珠
実力で入って悠々留年し　弘生
実力で金借りに行く銀行　岳人
黒帯を締めるとけんかしたくなる　勝美
実力を秘めた男の低い腰　湖風
絹のころも僧の肌着の白が冴え　かずを
決め手などないが裸と言う強気　鎮彦
肌着むんむん独身寮の隅に積み　喜風
こんなミスまさか決め手になろうとは　良京
白鳥が飛んでる様なチギレ雲　白屯

川柳塔まつえ　恒松　町紅報

よっぽどのショック仕事が手につかず　舞吉
漫才のような夫婦で溝がない　巡歩
それからの馴染み喫茶で昼を逢う　紫吻
むだ骨の修業を積んだ芸が冴え　新雪
手拍子も音痴はやはり一つずれ　与根一
仮面いくつ持てば漫才やれるだろ　孤呂二
釘を打つ音で別れを締めくくる　愚童
ドライブのタイヤへ妬いた釘がたち　鉄花人
釘箱にひと役終えた釘ばかり　登美也
いい加減に叩けば曲る釘の意地　由郎
悲しみで打つ釘の音なぜ冴える　みのる
風邪二日寝て女手のありがたさ　芳子
平和運動の道を進ませた父の義手　鶴丸
善人の悔いが手酌を重ねさせ　芳枝
破局の日コーヒー持つ手が知っている　寿美子
手にあまる話を拾う母があり　孝華
仏像の片手はてのひら見せる慈悲　快哉
庖丁の冴えで馴染みの客がふえ　正朗
いつまでも錆びない釘で勤める気　三和
無駄釘もあちこち父の兎小屋　孝
銭湯の馴染み互いに背を流し　雪美
苦労した手だからそっとしておこう　町紅

川柳しんぐう　川上　渓水報

老肌へ太陽容赦なくささり　まさ子
太陽の味かみしめるひなたぼこ　十郎
太陽の恵みへひまわり顔を向け　富子
太陽に暑い寒いとぐちばかり　八千代
太陽の光りまぶしい病みあがり　澄孝
返還へソ連はあっち向いたまま　大輪
失業の身へも勤労感謝の日　渓水
ふところの軽さを知った母の感　登紀夫
手応えの確かにあった握手感　朝夢
感じとは違う噂を持つ女　与呂志
永年の感に予報が負けている　ふみ
目立たない父の遺徳に生かされる　幸
葬列の長さに遺徳を読んでいる　千寿子
知事さんの弔辞遺徳を披露する　里美
天神祭遺徳が夏の風物詩　喜酔
碑が語る遺徳を慕う香の列　白光子
ソ連にもバーゲンセールあるやろか　明男
手の届く位置のソ連とつなげぬ手　登志代
ソ連から亡命してこいサケマスよ　秀雄
北方を足場にソ連世をにらみ　義廉

いずも川柳会　板垣　草丘報

岩かげで一と息入れる蟹の泡　代仕男
陽を受けて赤いトマトの赤い露　正朗
泡吹いて郷土を背負うた松葉蟹　芳子
翔び過ぎた女バランス崩れ出し　町紅
航跡の白さに恋を捨てる旅　寿美子
芋の葉は露を真珠として宿し　芳正
泡ぽとり森青蛙池で待つ　草丘
急行便もう届いたと子の電話　正江
子を踊に親がバランスとるシーソー　流石
キャンセルの急行券でやっと逢い　独仙
年金のバランス崩す物価高　河南
泡いつか消える運命の夫婦像　晴月
子宝のバランス三男三女産む　きみえ
急行で来いと和解の線が出る　軒太楼
泡立ちの加減で者物の味が出来　孝太郎
蟹猛る泡沸々と抗議する　幸一
野仏も露にしっとり濡れて立つ　みのる
朝市へどさり降ろした茄子の露　耕草
露の下蟻のスタート勢揃い　緑之助

川柳わかやま　堀端　三男報

こんな時気さくにさよなら言えたなら　和子
とまどいに決断つけた自動ドア　正博
足まめに見舞われ生きるファイト湧く　英子
産声に付添う母も汗しずく　豊
頑張った軍手の泥に満ちたりる　裕美
足まめな闘志につきが味方する　三千代
朝顔が気さくに垣根越えて咲く　紀久子
頑張って夢をみつけた車椅子　緑楼
口惜しさが頑張る根性うえつける　登志代
足まめも母が居る間の里帰り　武雄
足まめが或る日冒険したくなる　公子
老いらくの恋足まめな顔の艶　勇太
頑張って来いとは花嫁の父言わず　十郎
気さくさを褒めて用事を置いていき　弘生
頑張らぬ主役が鈴をつけられる　規不風
貧乏も気さくにこなす妻が居て　秀雄
十円で気さくに飛んで来てくれる　克子
下駄ばきの社長と出逢う市場竈　武太
妻気さく近所のよろず相談所　柳宏子
損得を言わぬ気さくが下座に居る　すみ子

菜の花句会　高杉　鬼遊報

女ひとり新今宮を出る度胸　与呂志
島に橋架けたら車に悩まされ　雅風
燃えているときは両耳聞えない　度
里帰り犬は晴着をわきまえず　儀一
欲を持つ人が架けてる橋である　凡九郎
渦巻の出口を探ぐる苦労性　茂雄
燃えるのはよそう明日はきっと雨　健司
改装費飲みに来てとは宗右衛門町　蕉露
指先に人を見分ける渦がある　射月芳
ジャンケンポン負けたものから渡る橋　酔々
低い腰見せる船場で油断する　鎮彦
ドラマではないが渡れぬ橋もある　頂留子
吠えてやる人が来たなと夫の鼻　悦郎
渦を巻く渕は地蔵が守ってる　シマ子

佳句地10選（前月号から）

板尾岳人選

はすかいに朝のいくさが走り出す　白兎
斜めから予言を斬って想い断つ　寿子
野仏の鼻のかけらに耐えを知る　道子
臨終に季節外れの西瓜買う　美佐子
昼寝から醒めて花緒のゆるい下駄　水客
裏街でこんなきれいな花に会い　ひで
遮断機が下りて野良犬向きをかえ　牧郎
ええように転んで祈りがきいてきた　博泉
わかれ道暖かい風を嗅いでみる　和子
隙のない男きれいな靴を履き　久米雄

送り火が燃えると命軽くなる　雀踊子
夫婦げんか橋の中ほど手をつなぎ　道子
プラットに二つの影の別れかな　栞
よくしゃべる女で渦から出て来ない　弥生
上役へわたしの影がお辞儀する　鬼遊
一の橋二の橋別れがつらくなり　糸葉

南大阪川柳会　中川　滋雀報

からだ一ぱい自由を持っているヤング　雀踊子
ヤングもう俺をオジンとぬかしよる　瓢太
ヤングパワー陽にはじけてる甲子園　節子
七五〇が僕の玩具と云うヤング　善紫
破れても破れても貼る夫婦の絵　度
反骨の男が破る鉄の門　酔々
しきたりを破ってからの孤独感　頂留子
約束を破って企みから逃れ　滋雀
破れたら繕う心の糸が欲し　洋子
やき鳥の屋台で行革論じ合い　蘭
焼き鳥屋自慢の味は炭で焼き　憲祐
休日のテレビに孤独を埋めている　君子
夏休み家のせまさを知る我が家　好一
休みたい時に休んで小商人　千梢
八つ当り心の狭さみえている　楓楽
肩書は肩書なりの八つ当り　文秋
ボリュームを一ぱい上げた八つ当り　勝美
八つ当り予知して膝の描が逃げ　あいき
子育ても済んだ心のすきま風　柳宏子
無礼講やれやれ酒が飲めそうだ　恒明

川柳大阪　西岡　洛酔報

押し寿司に変形手みやげたどりつき　比呂志
人生の坂道だけは転ぶまい　善紫
一輪の朝顔玄関和むあさ　ひろ子
ええかっこう息切れしてる二段駈け　酔花
地図買えば新線廃線忙しい　秀峰
歩くのが薬と医者に奨められ　三十四
俎板にのぼれば鯉より取り乱し　喜酔
飯ごうで平和の米をとぐキャンプ　君枝
人生に終着の無い設計図　与呂志
自画自讃汝テングになるなかれ　重人
犬病んでようやく鎖から解かれ　本蔭棒
宝石へ夢果てしない女びと　洛酔
帰省して旅装のままの水うまし　六龍子
喜びは大地に立った孫の足　敏
日記帳今日も迷うて色をぬり　淳水
迷うたけど見舞ってよかったしこり取れ　道子
迷うことあるから笑える事もある　凡九郎
羨みに少うし褪せた裏話　弘生
割切った男羨やむこともなし　笑風

川柳後楽　井上柳五郎報

背信を忘れるための酒もある　青銅
教育勅語とっくに忘れている平話　秋月
胸どんと叩いていたのに忘れとり　七面山
忘れたい過去へ他人がまた触れる　幽谷
息詰めて立った相手に待ったされ　定平
子の寝息確め合うている夫婦　哲郎
溜息のつづく世相を淋しがり　佐加恵
息遣い変った祖母の手を握り　元一
核心を突かれて息の根が止り　恒洋
お世辞にも言葉の端に出る皮肉　和夫
端ばしに頭を下げて票を釣り　番茶
端のない枝かも知れぬかたつむり　草風
端っこに生きてもでっかい夢がある　玉水
端にある拇印男の指のあと　照路

第31回富田林市文化祭

川柳大会

とき　昭和56年11月8日(日)(11時開場)

ところ　東公民館
富田林駅下車・金剛バスにて
(何行きにても可)川向下車
東北2分

柳話　川村好郎氏

兼題と選者
「ガラス」　岩本雀踊子選
「コロッケ」　森中恵美子選
「メッキ」　中尾薬介選
「イメージ」　橘高薫風選
「ローソク」　西尾栞選
「新館」　阿部柳太選

特別課題　当日一題　定金冬二選
(〆切り1時30分・各題三句吐)

席題
各題秀句に市長賞楯

賞
大会費　五百円　懇親宴　二千円

主催　富田林文化連盟
後援　富田柳会

悪い癖言葉の端をまたつかみ　久米雄
通り魔を誘う女に隙が見え　宏大
通り魔と知らずに夜の道を聞き　博友
通り魔の街は風呂屋も客が減り　梁太
馬鹿にされ通り魔となるガキ大将　柳五郎

尼崎いくしま川柳会　黒川紫香報

海亀の祈りが潮にこだまする　和子
クーラーと一味ちがう風の味　まさ
脱いだシャツ男にいくさの匂いする　ハツエ
灼熱に風鈴だけが涼しそう　保蔵
風鈴もぽつぽつ引退する気配　すえ
風鈴は家の雲行きなどしらず　浩
風鈴が逢瀬のムード弾ませる　唯夫
植木鉢卵の殻が並んでる　弥生
卵の値上るも下るも知らず産み　かすみ
弾む日はきれいにむけるゆで卵　美智子
目玉焼二つふたりだけの朝　牧郎
入室を禁じた部屋で音がする　紫香
病身で長寿の手相もてあまし　晴子
旅したし病夫かかえて地図旅行　湖澄
盲人会夫もアチコチお供する　貞子
瓢右衛門傘寿の道に花が咲き　伊三郎
逢いたくて斜の雨に濡れてゆく　郁栄
殿方は図鑑にのらぬ蝶が好き　幸子

城北川柳会　川口弘生報

百階に住んで地球を信じきる　三和
争いも睦みもあった金魚鉢　右近
麦わら帽着せねば案山子絵にならず　登志代
子離れはしていた筈を秋の虫　満津子
萩ききょう余生を飾る彩はなに　千世子
父の知恵らしく見せてる母の知恵　ふみ
スプーンかき混ぜて眩しい女といる　婦美子
満たされぬ絵ばかりつなぎ西日さす　はつ絵
二人三脚漫画のように夫婦です　千子
天高し洛南道をひとり行く　弘
物価高晴耕雨読をあきらめる　星斗
めいめいの想いで苔見に来た出逢い　英壬子
孫からの手紙はマンガでいっぱいで　テルミ
その昔祭り太鼓の音惜しむ　喜代子
一期一会なんだか別れ惜しまれて　松太朗
元気すぎる母の手紙を不安がり　道子
共稼ぎインスタントの置手紙　公一
夏惜しむ秋ほど詩情わいてこず　眉水
青春の花火を惜しむ秋の風　美恵
すばらしい出逢いは仮面もってない　三十四

川柳たけはら　森井菁居報

満更でない試されている私　静水
諦めていたのにチカチカ芽がのぞく　房子
母と子の会話涼しい蟬時雨　笑子
ふっと亡母そこにいそうな昨日今日　こうじ
主婦という重み一升米を研ぐ　比呂子
かくし味のような女房の愚痴をきく　鈍舟
中三の夏でもエンジョイしたい海　中三愛
早起きしたのね朝がおほめてくれ　小六紀
どんな顔してるか電話の長話　小四仁昭
五十路とやあれも影かやこれも影　不朽
反論が出来る子供を信じよう　菁居
美しく老いたし白髪白いまま　里香
炎天の歩幅たしかに職がある　鬼焼
妻の財布お守りばかり入れてある　蘭幸
満ち潮の渚へ闘志湧いて来る　節夫
傷ついた女をいやすレモンティー　秀水
初盆や亡父に盃供えよう　英詩
近道は性に合わない駄馬の足　一路
良い嫁と住み仕合せな風呂かげん　かつ子
昨日捨てた空缶が要る羽目になり　貞子
サイコロのころがる果ての昼の酒　かつこ

にた川柳会　西村早苗報

食欲の秋が恐ろし肥満体　独仙
電話よりやはり手紙にあるぬくみ　鉄花人
としよりがぷつりと切ったラブシーン　登美也
洗いものありませんかは有難い　亀甲
金木犀があるらし匂う夜の散歩　千草
あれこれとうわさ拾って美容院　孝華
夏涸れの宿の廊下に蜘蛛たむろ　多賀子
涙には腕い男で瞞まされる　幸一
百点の子の足音を母は知り　栄
明治強しわらんじの紐切れるまで　巡歩
辞書を繰る手付きぎびしさ増して秋　裕
そうそうに近所を抜ける若作り　夢酔
音痴が唄えば手拍子いつか止み　きみえ
人生多彩夢がまだまだある未来　〆女
やりくりで母子を飾る七五三　花子
夫の忌が近づき独りの年数え　寿美子
大胆なポーズ初老の瞳にまぶし　雄々
反省の糸口ふさぐ孤独感　弘朗
おそかった女をなじる待ち呆け　早苗

川柳塔柳箋

一冊　二百円
送料　二百四十円

本社11月句会

日時　十一月六日（金）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話　271・3935番

おはなし　上田翠光

兼題
「灰」　宮西弥生選
「通る」　金井文秋選
「無限」　若柳潮花選
「時間」　大坂形水選

席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　三百円

★投句は句箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

12月の兼題　「音」「近い」　「指」「決断」

本社12月句会は７日(月)

年賀広告受付！

★一口五百円（タテ3・3cm×横5cm）本誌五段組の一段分が二千五百円です。
★原稿締切＝11月25日
よろしくご協力お願い致します。

川柳塔社

募集

一月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）正本水客選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「素直」　江口度選
「エプロン」　小笠原青女選
「巣」　大塚勇選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）正本水客選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「いのち」　鈴木村諷子選
「無口」　藤田頂留子選
「赤」　杉浦婦美子選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

11月の常任理事会は２日５時から

定価　五百円（送料45円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和五十六年十一月二十五日印刷
昭和五十六年十一月一日発行
編集兼発行人　中島逢太郎
印刷所　藤原童心社
〒545　大阪市阿倍野区三明町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六）六二一一六九一四番
振替口座大阪・三三三六八番

編集後記

▼十一月号をお送りする。同人特集「はたらくうた」に代り「後進にのぞむ」を各地の元老にいただいた。▼一つの事実に対しての評価も人によりまちまちであるのは世の通例であるが、この編集後記にしてからが路郎先生や一三夫さんの筆をなつかしむ意見を寄せられた方がある。四人で書くことになってから味がなくなったというのは筆者も同感で、短いスペースでは玄関も庭もない応接間だけの建物に似た文章になってしまう。それでも一三夫さんがお一人でひっかまえて編集されていたのとは違う体制なのだから、また、四人の方が変化があって良いという読者もおられることだから、当分この形を続けたい。

▼年賀広告よろしく（薫）

▼米朝落語全集が刊行中である。読んでいると、大阪に住んでいながら、知らないことが多いのに、われながらじくじたるものがある。三十石夢の通路という落語にこんな場面がある。「大阪に橋は無いで」「大阪は八百八橋ちゅうぐらいやないかいな。なんぼでも橋はあるがな」「どこにある」「天神橋、天満橋、淀屋橋、浪花橋」「そらみな、ばしやがな」「えェ」「大阪にははしがあらへんがな、なあ。京都は三条の大橋、四条の大橋、みなこれはしや」というぐあいで、大阪は、ばしで京都は、はしとなる。まあ探せば大阪にも、はしがあるかも知れないが。案外身近かなことで気がつかないことが多い。川柳作品もじっくり読んでみると、いろんなことを教えられるものである。（酔）

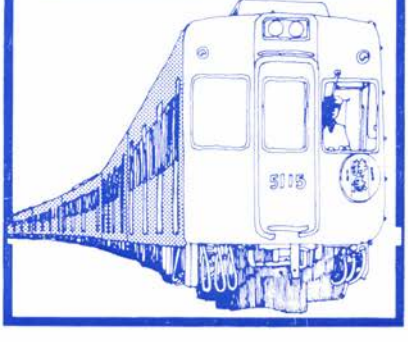
◇本社新事務所の向いに一軒の大衆食堂がある。阿倍野区役所、税務署、府税事務所の他、附近の会社などで働く人々がお得意のようである。本社の事務所開きもこの店のお世話になる。まことに感じのよい中年夫婦がやっている。川柳社会化運動に燃えている板尾岳人氏が、そこの主人に作句を強いた。お客の要求に応えた一句が、十月号〃水煙抄〃末尾の〃あれ買うてこれ買うてが寝てしまい〃である。選者の正本水客氏はそんな経緯を知らない。これだけでは話にならない。十一月号〃水煙抄秀句鑑賞欄〃を見て頂きたい。初めてのこの一句が早々と登場している。川柳人はこうして生れてくるようだ。皆さんも会われる人々に川柳を勧めて頂きたい。（き）

☆紳士服や婦人服の売場には必ず試着室（フィッティングルーム）というのがある。三方カーテンで囲むと狭いながら密室に違いないのに、あの中で上衣を取り、とりわけズボンを脱ぐという作業は決して気分のよいものではない。鏡に映る哀れな下着姿、足許に脱ぎ捨てられた衣類の何とくたびれ、みじめに見えることか。あの気分がいやで折角の購買欲が萎んでしまうことがまま、あるのである。

☆ところで水着売場にも、この試着室がある。あって当然。しかし水着というのは肌着の上につけるものではない。では体にフィットするかどうか如何にして試すのであるか。こんなくだらない事が気になるのも夏が暑すぎたせいだ。十一月そろそろ頭を冷やさねば。（史）

肉体疲労時のVB1補給に——
アリナミンA
アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB1補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社　〒541 大阪市東区道修町2-27
タケダ

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ
阪急電車



昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十六年十月二十五日 印刷
昭和五十六年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻六五四号 川柳塔 十一月号
定価 五百円（送料四十五円）

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 鳴門
政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに
観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

南海電鉄

雑誌 05703−11